

【論文】

注意と連合
アンリ・ベルクソン『コレッジ・ド・フランス講義録1903-1904
年度 記憶理論の歴史』合評会記録（現代諸科学との接合編）¹

藤田尚志・兼本浩祐・澤幸祐・岡嶋隆佑・
平井靖史・天野恵美理・木山裕登²

イントロダクション（藤田尚志）

ベルクソンのコレッジ・ド・フランス講義録としてはすでに1902-1903年度の『時間観念の歴史』の邦訳が出ており（書肆心水、2019年）、その刊行時にも三つほど合評会を開催しましたが³、今回はその続巻である『記憶理論の歴史』（書肆心水、2023年）が刊行されたことを記念してのイベントということになります。二つの合評会が予定されており、第一弾の今日は「現代諸科学との接合編」、第二弾の次回は「哲学史編」と題して、対になるような形でイベントを組みました。これは本講義自体が（方法論的考察に充てられている第1講・第2講を除けば）、第3講～第14講が理論篇⁴、第15講～第19講が歴史篇となっていることに対応しています。

すでに一昨年のことになりますが、2022年にベルクソンに関する研究書が一挙に五冊刊行され、巷では“ベルクソン・ルネサンス”と言われたりもしました。その中でも特に平井靖史さんや米田翼さんのお仕事では、英米系の分析哲学のみならず、神経科学や分子生物学といった現代の諸科学との接合が積極的に推し進められました。一昔前であれば、非科学的・非合理的なロマン主義哲学だと一笑に付され相手にもされなかったものが、そうではなくて、むしろベルクソン哲学というのは科学者たちとの協働を積極的に進めようとする哲学であるということが一般的な共通理解としてかなり広まってきたふしがあります。これは20年前と比べて明らかに違うところで、ベルクソン研究に携わってきた研究者たちの努力の甲斐もあって、ようやく偏見抜きにベルクソン自身の考えと向き合えるようになってきたと言っていいいでしょう。例えば『思考と動き』の序論で、ベルクソンはこんなことを述べています。

私は科学の検討に服すると同時に、科学を前進させるような哲学を望んだ。私はそれに

成功したと考えている。心理学、神経学 (neurologie)、病理学 (pathologie)、生物学が、当初は逆説的 (paradoxales) だと見なされていた私の見解を次第に受け入れるようになったからだ。しかし仮に逆説的なままであったとしても、私の見解は決して反科学的ではなかったはずである。私の見解は科学と境界を同じくし、多くの点において検証を受け入れるような形而上学を構成する努力を常に示していた。[Bergson 2009: 70=2013: 91]⁵

「科学の検討に服すると同時に、科学を前進させる」とは、「科学と共に考える」ということですが、それは当時の科学者の主流となる理論に追随・盲信し、その権威を笠に着ることでもなければ、反科学的で非合理的な言辞を弄することでももちろんない。ある科学的知見を得ることで己の蒙を啓かれると同時に、その科学が暗黙の裡に前提としている事柄を明るみに出し、その可能性と限界を探ること——それは「科学の批判」ではありえても、決して「科学の否定」ではありません。

このようにベルクソンが「科学と共に前進する哲学」ということを考えた哲学者であったとして、ではどのような科学と向き合っていたのかということが次に問題になります。この点について、先の引用では、心理学 (第一主著『意識に直接与えられたものについての試論』)、神経学・病理学 (第二主著『物質と記憶』)、生物学 (第三主著『創造的進化』) といった学問が挙げられていましたが、もう少し先のところで、より詳しく次のように述べています。

最初の著書〔『試論』〕で内的生命に関して述べたことだけでは、後で〔『物質と記憶』〕で行なった知的諸機能の究明、すなわち記憶力・観念連合・抽象化・一般化、解釈作用・注意 (attention) などの究明はできなかった。一方では精神生理学 (psycho-physiologie) が、他方では精神病理学 (psycho-pathologie) が私の目を開いてくれた (…。) 実際、そうした研究は私に問題を別な風に提起させることになった。そしてそこから得られた結果は、精神生理学と精神病理学そのものにも影響を与えずにはいなかった。ここでは精神病理学に関することに話を限り、心理的な緊張 (tension psychologique) と生への注意 (attention à la vie) に関する考察および「精神分裂病」(schizophrénie) の概念が含むすべての事柄が次第に重要な意義を得てきたことだけを指摘しておこう。[Bergson 2009: 81=2013: 103]

一方では心理状態と身体の反応の関係性を研究する精神生理学、もう一方では人間の「こころ」とその病の理論的な分析や記述・分類・整理を行う精神病理学の知見を摂取していく中で、ベルクソン自身の研究の方向性も変わってきたし、また逆に、それらの知見に対して自分が加

えた考察によって、当の諸科学自体も少しずつ変わっていった、と。互いに刺激を与えながら進んでいったんだ、ということが言われているわけです。今回のこの合評会第一弾で、一方でウィリアム・ジェイムズ『心理学』を翻訳した今田寛先生を師とされ、学習心理学をご専門とする澤幸祐先生に、他方で精神病理学に通じ、岩波『フロイト全集』の失語症に関する第1巻を監修された兼本浩祐先生にお越しいただいたのは、この引用が念頭にあってのことでした。

そういうわけで今日は、ベルクソン自身が刺激を受け、またその発展に自分なりに寄与したと自負している学問領域で、しかもベルクソンに熱い視線を注ぎながら活発な研究を展開されているお二人をお呼びして、ベルクソンが『物質と記憶』以後に最も詳しくそれらの領域に踏み込んだ講義の記録を読んで何を感じ、何を考えたのかについてお話を伺おうと思っております。そしてベルクソンにはまったく及ばないながら、ベルクソン研究者の側からそのお話に対して何がしかの応答ができればと願っております。ベルクソンがこの『記憶理論の歴史』講義の一つのハイライトとも言うべき第6講を行なったのが1904年1月29日、つまりちょうど120年前の今日だったわけですが、彼がやっていたことを、私たちなりの仕方で“反復”してみよう、とそういう企画です。

今日のプログラムですが、まずは共訳者のお一人である新潟大学の岡嶋隆佑先生に講義録の前半部分である理論篇のダイジェストをざっくりとご紹介いただきます。次に兼本浩祐先生にお話をいただき、共訳者5名との質疑応答があります。その後、休憩を挟んで、今度は澤幸祐先生のお話を伺い、それに対してまた応答者とのやり取りをし、最後にフロアからの質問やコメントをいただく、というふうに考えております。

I. 講義録前半の内容紹介（岡嶋隆佑）

はじめに

前半の内容紹介担当の岡嶋です。よろしくお願ひ致します。持ち時間が15分と短いため、全ての章の内容を概説するのではなく、この講義で展開されるベルクソンの記憶理論の主要な部分を、未読の方にもわかるような形で紹介してみたいと思います。

導入

その前に、まずはこの講義録がどういった性質のものかという点についてごく簡単に見ておきましょう。本書は、ベルクソンが、コレージュ・ド・フランスの教授となってから4年目の講義の記録です。前年度の講義は、すでに私たちが翻訳した『時間観念の歴史』ですので、こ

の『記憶理論の歴史』はその続きに相当します。続きといっても、同じ主題が扱われているわけではありません。表題からも明らかのように、前年度が「時間」を扱っていたのに対して、本講義では「記憶」がテーマとなっています。主題だけでなく、構成もだいぶ異なっていて、『時間観念の歴史』が、タイトルの通り、古代から近代に至るまでの時間概念についての「歴史」的考察を行うものであったのに対して、『記憶講義』の方はというと、たしかに歴史的考察も含まれてはいて、それはそれで重要なのですが、分量的には、後半の5講にすぎず、第14講までは、大部分、記憶にかかわるベルクソン自身の記憶理論が展開されています。ですので、本書は、単なる学説史、哲学史というよりもむしろ、著者自身による『物質と記憶』解説という側面が強い著作と言って良いでしょう。ただし、その内容は、単に自説を語り直したものではありません。本書は、これから紹介するとおり、『物質と記憶』にはなかった説明や議論、新たな概念区分を提示しており、この観点から言えば、同じく同書を元にした着想が提示された論集『精神のエネルギー』に匹敵する資料だと言っても過言ではないでしょう。また、この講義録には、すでに邦訳されている他の講義録と同じく、ベルクソンの著作、とくに『物質と記憶』の論述に比して、圧倒的にわかりやすいという特徴があります。ですので、研究者に限らず、『物質と記憶』を読みたい、理解したいという人や、『物質と記憶』は難しすぎて投げってしまったという人にもぜひ一度手に取っていただきたいと思っています。

前置きはこのくらいにして、内容に入りましょう。最初の講義でベルクソンは、この年度の講義全体を「諸分析の研究と検討」（第14講まで）と「哲学史への依拠、諸学説の進展に関する研究」（第15講以降）の二つに分けています（30ページ）。

前半部について言われる「分析」というのは、当時の「心理学」のさまざまな成果のことで、そこでは、当然それらについての考察や批判も展開されているのですが、それと並行して、『物質と記憶』の第二章、第三章の記憶理論に相当する内容が、発展的な形で語り直されています。その内容のうち、ここからは、「再認」と「意識の諸平面」という二つ論点に絞って見て行きましょう。具体的には、第5講と第6講の一部がこれから紹介する部分です。

三種の再認論

第5講でベルクソンは、まず、再認——何かを再び認める働き——に、三つの種類を区別しています。これまで私たちの手元にあった資料、とくに『物質と記憶』と比較するとき、おそらくこの点が、まずもって強調すべき論点です。というのも、『物質と記憶』では「自動的再認」と「注意的再認」という二種類の再認の区別しか存在しなかったのに対して、本講義では、「個人的再認」という第三の再認の区分が新たに設けられているからです。

最初の二種類の再認、自動的再認と注意的再認について、ごく簡単に確認しておきましょう。自動的再認とは、対象が知覚される際に、その対象を利用する運動の「傾向」が自動的に引き続くことです（98-100ページ）。ベルクソンによれば、私たちの身体は、習慣によって、フォークやドアのような日常的な対象を用いるために必要な運動を、さまざまな運動メカニズムという形で蓄えています。そして各メカニズムは、フォークであればフォークを、ドアであればドアを見ただけで、発動しようとします。しようとする、傾向がある点が重要で、対象は必ずしも実際に使われる必要はありません。実際に使用される手前、目に入った段階で、すでに身体の内では、一定の自動的な運動傾向が生じていて、その傾向が感じられることで、私たちは、日常的な対象を、「見たことがある」ものとして認識できるようになる。これが、ベルクソンのいう自動的再認です。

この第一の再認、自動的再認が、「もっぱら運動的でしかない」のに対して、「知覚したものに似た記憶、表象、イメージ」を伴う再認（104ページ）は、注意的再認と呼ばれます。この第二の再認を説明するのに、『物質と記憶』は、ミュラーとゴルトシャイダーの実験を引き合いに出していますが、本書でも注意の働きを説明する際に同じ実験を参照しています。それが示すところによれば、例えば「新聞を読む」とき、私たちはそこに印刷された「一文字一文字」を見ているわけではありません。実際に知覚として、視覚的な印象として与えられているのは、単語や文字のいくつかの特徴的な形に過ぎず、私たちは残りの大部分を、記憶に由来するイメージで補っているのだ、とベルクソンは言います（cf. 156-157ページ）。だから、単語を構成する文字が入れ替わっていたとしても、私たちはそれを認識できてしまうわけですね。

この注意的再認において重要なのが、知覚と記憶の媒介者の役割を果たしている「図式」と呼ばれるものの存在です。本書でベルクソンは、図式を「目にした対象を大まかに描き出すためになさねばならない或る特定の動きを凝結させた表象」（87ページ）と定義しています。例えば、ある特定の文字を書くためには、ペンを一定の握力で握って、一定の順序で指や腕、手首を動かす必要がありますよね。そうした、身体運動の一定のまとまりが、その文字の図式と呼ばれるもので、この図式を媒介として、先ほど述べたような、記憶イメージによって知覚が補完されることで、書かれた文字や文の意味が理解されるようになる。これが、注意的再認の仕組みです。

ここまでの話、つまり自動的再認と注意的再認の区分や内実について、この講義の記述と『物質と記憶』をはじめとしたその他の著作の記述にそれほど大きな相違はありません。大きな違いはないのですが、一点だけこの講義を他の著作と並行的に読む際に気をつけていただきたいのは、図式という存在の位置付けです。いま導入した図式というのは、『物質と記憶』では「運

動図式 (schème moteur)」と呼ばれていたもので、これは基本的に、身体、とりわけ脳に位置付けられるものです。その一方で、ベルクソン哲学にはもう一つ、「動的図式 (schéma dynamique)」という概念があって、これはこの講義の一年前に刊行された雑誌論文「知的努力」の中で提示されたものなのですが、この動的図式の方は、身体的なものではなく、心理的なものです。『物質と記憶』と「知的努力」だけを読んでも、両者の区別は明確なのですが、この講義では、『物質と記憶』であれば運動図式と呼ぶべきものに動的図式という名前が与えられていたり、心理的なものではあっても、「知的努力」の動的図式とはやや異なる意味で動的図式という言葉が用いられていたりする部分があります。ベルクソン研究の観点からは非常に興味深い、検討のしがいがある論点なのですが、普通に読み比べをする場合には混乱してしまうと思うので、さしあたり、本書の図式概念はそれほど明瞭なものではない、という点を頭に入れた上で、読み進めるのが良いと思います。

さて、以上二つの再認を前提にしつつ、この講義で新たに提示されるのが「個人的再認」という区分です。「個人的=人格的 (personnel)」というのは、この再認において、「心に蘇ってくるのが、個人的な色合いを備えた自分自身の過去」(105ページ) だからです。どういうことか、「椅子」の再認を例に説明がされています。同じ例で、私なりに少しアレンジして説明してみようと思います。ベルクソンの再認論によれば、例えば、自分の仕事場にある椅子を、私たちは三つの異なる仕方でも再認することができます。これから仕事を始めようと椅子を引き、腰をかけるとき、あるいは別の部屋から戻ってきて次の作業を始めようとするとき、私たちは椅子の存在をさほど意識せず、ほとんど自動的に振る舞っているはずですが、これが最初に紹介した自動的再認と呼ばれる認識のあり方です。次に、例えば、誰かに自分の椅子について尋ねられて、自分が座っている椅子に改めて注意を向け、それが「椅子」であることや、どういうタイプの椅子か、どんなメーカーの椅子かなどといった情報を引き出すとき、そこで生じている再認は、注意的な再認と言って良いでしょう。しかし例えば、そうした会話をしている最中、ふと、その同じ椅子を自分がいつ、どこで買ったのか、その当時の具体的な出来事が思い出される場合もあるでしょう。あるいは、そこまで至らなくとも、長い間使い続けてきて、さまざまなエピソードがあるがゆえに、その椅子が、単なる日用品以上に、非常に「親密な」(107ページ)ものとして感じられるといったことがあるはずですが、このとき生じているのが、「個人的」と言われる再認で、ベルクソンは、それに伴う質感について次のように述べています。「この対象が私たちの個人的な経験に属していて、いわば私たちの個人史の中に場所を占めているという、非常にはっきりとした感じがあります。この歴史に属していて、この歴史からある特定の色合いを借り受けている、という感じです」(108ページ)。こうした質感の有無によって、個人

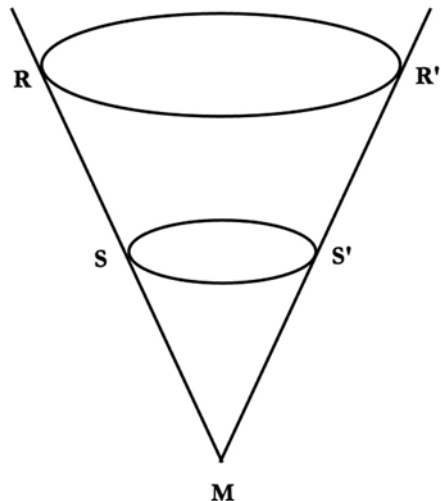
的な再認は、他の二つの再認から明確に区別され、またこの新たな再認と対比される場合、自動的再認と注意的な再認は、「非個人的な (impersonnel)」と呼ばれることになります。

意識の諸平面

以上が講義で提示される再認論の概略でした。これが重要なのは、まずもって、こうした新たな再認の区分から、記憶の全体像が、『物質と記憶』よりも直接的な仕方で導かれている (cf. 113-115ページ) ためです。『物質と記憶』では、第二章で自動的・注意的という再認の区分が提示されていて、記憶の全体像、あの逆円錐によって示される記憶の全貌が語られるのは、第三章でした。なので、両者を関連づけるには一定の解釈が必要であったわけですが、新しい再認の区分が追加されたことで、この講義では、再認論と意識の諸平面の理論がダイレクトに結び付けられているんですね。わかりやすくなったかという点、そういうわけでもないのですが、ともかく、逆円錐が『物質と記憶』で示される第6講は、本書の中でも最も目を惹く講義だと思うので、残りの時間で可能な範囲でその概説を試みたいと思います。

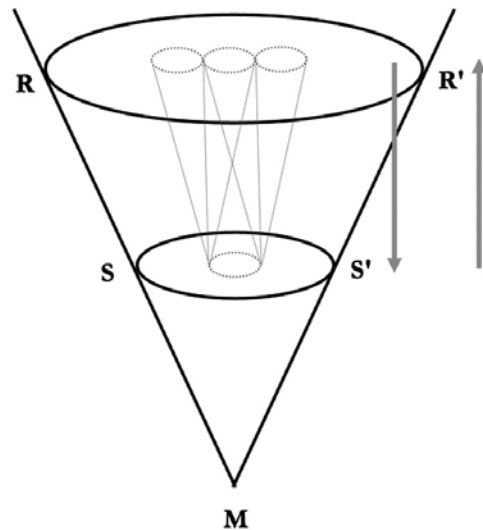
最初の図は本書の第6講 (114ページ) にあるものです。ベルクソン自身が書いたものが残っているわけではなく、ベルクソンの説明から再現したものなので、実際には、これと異なる図が書かれていた可能性もあるという点には注意が必要です。また、この図では本来、「図式」も問題になるのですが、図式概念については、先に指摘した問題があるので、関連する部分を省いて、「椅子」の再認を例に概説してみようと思います。まず、図中Mは自動的再認で用いられる運動反応のことで、これをベルクソンは、「運動記憶」(113ページ) と言い換えています。

運動 (mouvement) とメカニズム (mécanisme) の頭文字をとってMです。椅子の再認で言えば、椅子からもたらされる視覚的印象に対して、自動的に惹起される運動のストックがこれに相当します。このMの上方に描かれている平面SS'には、椅子のさまざまなイメージ、さまざまに形や色の異なる椅子のイメージがあります。Sはsouvenir、記憶のSです。イメージがあると言っても、それが利用され、現実のものとなるわけではないので、あくまで「潜在的な」(114ページ)



ジ) 状態で存在しているということです。

次の図の灰色の箇所は、私が説明のために書き入れた部分です。いま述べた潜在的なイメージを、図では波線によって表現してみました。注意的再認が生じる場合、これらのイメージのうちの一つが使用され、目の前の対象がどんなタイプの椅子か、場合によっては、どこのメーカーの椅子かなどといったことがわかるようになるはずで、重要なのは、そのようにして使用されたイメージ自体、実は、椅子についての過去の個人的な記憶



から構成されたものだという点です。いま目の前の対象、目の前の椅子が、注意的に再認されているとします。それを可能にしているイメージは、ベルクソンによれば、その椅子に関する膨大な数の個人的記憶から構成されたもので、そうした記憶が並べられるのが、平面SS'の上方に描かれた平面RR'です。Rはrêve、夢のrです。なぜ夢かという、この円錐の底面に置かれた記憶が意識に現れるのは、夢のなか、それも起きてから思い出すことができないような夢の中だからなのですが、その点については深入りしないでおきましょう。とにかく、このRR'に置かれた記憶から目の前の椅子のイメージはできている、ということです(図には三つしか書き入れていませんが、実際には、無数の記憶が存在していることに注意してください)。これは逆に言えば、それぞれのイメージの中に、過去の個人的記憶が潜在的には含まれているということです。だから、私たちは、目の前の椅子を見ながら、「自らをなすがままにすることで、その記憶が結びついている過去のある場面に戻ることができる」(108ページ)わけですね。この働きは「弛緩」(109ページ)と呼ばれています。図で言うと、下から上への矢印がこれに相当すると言って良いでしょう。

こうして、過去の想起という現象が、これはあくまで想起の仕方の一事例ではありますが、再認論の枠組みに位置付けられることになります。

この想起の現象、個人的再認は、現在、つまりMを起点としたものですが、この過程を逆側から見ることによって、つまり運動、現在の側からでなく、過去の側から、底面RR'の側から考えることによって、ベルクソンは、過去の現実化の働きを説明しています。図で言うと、上から下への方向です。この論点もこの講義で注目すべき論点の一つです。というのも、過去の

現実化のプロセスについて、この講義では『物質と記憶』とは異なる仕方で説明がされているからです。注意的な再認が行われるとき、そこで用いられるイメージの元になっているのは、無数の個人的な記憶だと言いました。そこで出来上がるイメージ、平凡なイメージ、例えば、あれこれの椅子のイメージを構成するプロセスには、この講義では、「干渉」だとか「中和」という名前が付けられています。引用しておきましょう。「極限にあるこの円は、円錐の頂点に向かって進むほど、ますます凝縮していきます。それは凝縮し、異なる記憶が混ざり合い、大量の類似した、しかし個人的な記憶が、互いに覆い合い、互いに干渉し合うことで、脱個人化して非個人的な記憶になります」(120ページ)。平井さんが訳者解説で指摘されているとおり、「中和」というタームは、『物質と記憶』では記憶論でなく、知覚論の文脈で用いられていたものだったのですが、それが、この講義では、記憶論に転用されているんですね。

さて、ここまでがさしあたり第6講で示される逆円錐図の概説です。この図によって何が強調されているのかという点について手短かに述べることで結びとさせていただきます。ベルクソンが強調しているのは、記憶というものが、全てが同じ水準にあるのではないということでした。記憶には、ここに示した、運動記憶、イメージの記憶、出来事の記憶といったような複数の水準、平面がある。もちろん、この三つの水準だけでなく、図示された水準の間にも無数の平面、水準を想定することができます。円錐図の頂点は「行動の平面＝水準」とも呼ばれますが、これと底面、「夢の平面＝水準」はいずれもあくまで「極限」に過ぎず、私たちはこれらの間を絶えず揺れ動いている、というのがベルクソンの主張です (cf. 118ページ)。そうした二極の設定や、揺れ動き、またそれぞれの平面には「記憶の全体」(176ページ)が含まれていることなどといった主張は、講義と『物質と記憶』で共通のもので、第7講以降の講義は、こうした理論の下で、「心の病」や「芸術における新規性」、「注意の理論」等さまざまな応用的議論が展開されます。そのうちのいくつかはこの後、先生方も取り上げてくださると思いますが、ひとまず私からはその基礎にあるベルクソンの記憶理論の骨子を紹介したということで、お二人にお繋ぎしたいと思います。ありがとうございました。

II-1. 兼本先生のご紹介

藤田——岡嶋さん、ポイントが非常によくわかる解説をありがとうございました。では、続きまして兼本先生をご紹介いたします。実は今回お招きしたお二人は、兼本浩祐先生も澤幸祐先生も（漢字は違うものの）どちらも「こうすけ」先生なんです。別に「だから何だ」ということもないんですけども（笑）。

兼本浩祐先生は長らく勤められた愛知医科大学の医学部精神科学講座の教授を昨年（2023年）ご退任され⁶、現在は中部PNESリサーチセンター所長を務めておられます。『心はどこまで脳なのだろうか』[兼本 2011] や『脳を通して私が生まれるとき』[兼本 2016] など、実に多くのご著書を出版され、またその旺盛な臨床・研究・執筆活動の傍らで、詩人としても活躍され、最新の『ぬかるみのような恋バナをしてみたい』まで六冊の詩集を出されています。ベルクソン研究に関連するものとしては2016年のPBJ（Project Bergson in Japan）シンポにご参加いただいた後[兼本 2017]、『なぜ私は一続きの私であるのか——ベルクソン・ドゥルーズ・精神病理』[兼本 2018] では本格的にベルクソンと取り組んでおられ、話題になった『普通という異常——健常発達という病』[兼本 2023] の中では、平井さんや私の研究もご参照いただいております。

「人間であることは疲れること」、米コロンビア大学でベルクソンが行なった講演でそう語っていると、藤田尚志先生の『ベルクソン 反時代的哲学』で最近読みました[藤田 2022: 37-38]。ドゥルーズを読んでいて常々感じていたのは、「でもそんなことをしたら、人間は人間のかたちをとれなくなるのではないか」という素朴な疑問でした。

藤田先生の本にあった、絶えざる「動的平衡状態」への努力によってかろうじてそのかたちを保っている息も絶え絶えな存在という人間像は、精神科臨床においては、これ以上はないような実感を持ってすっきりと腑に落ちる記述です。

ドゥルーズにはないこのベルクソンの保守性は、人間という外皮がいかに脆く儂いものであるか、それを保つためにいかに精妙な仕掛けと営々とした努力が必要かを目の当たりにする精神科臨床においては格別に納得のいくものです。[兼本 2023: 240-241]

この文章を引用させていただいたのは、別に拙著の宣伝のためではなく（笑）、先ほど岡嶋さんのお話にも登場した再認論ですとか、そういった話が心の病の話にもつながってくるんだということを強調するためです。タイトルからはそう見えませんが、『記憶理論の歴史』は、とりわけ第8講などで、けっこうなページを割いて「心の病」について語っている。このこともまた本講義録の魅力の一つです。ご講演がこのトピックにつながるかどうかはまた別の話ですけれども。それでは兼本先生、よろしくお願ひ致します。

II-2. ベルクソンの動的図式と運動図式において知覚と記憶はたぶんせめぎ合っている（兼本浩祐）

はじめに

最近、友人と古代ギリシア人には脳裏がないという話で盛り上がったことがあります。もちろんギリシア人に脳裏がないわけがないのですが、これは今取り組んでいる意識障害についての本の中での1つの大きなテーマになっています。もちろん古代ギリシア人は、意識を考える上で重要な様々の議論を非常に先駆的に行っているのですが、それでも近代人にとって程は意識は大きな問題ではなかったことが、意識障害の歴史をあとづけると分かるのですが、それをうまく言語化するのが非常に難しく感じています。意識という概念は17世紀のデカルトの時代以降、劇的に変化していて、もう私たちの思考のうちにあまりにも身体化されてしまっているので、それを引きはがして古代ギリシア人のように考えてみることはベルクソンが今回の講義の中でも指摘しているようになかなか至難のわざなのだと思います。今回のこの『記憶理論の歴史』は、前回の講義録『時間観念の歴史』をさらに補う形で、ギリシア人にとっての意識概念への接近の難しさがどのような構造になっているのかを考えるうえで大きなヒントになりそうな気がしています。藤田先生が講義録のあとがきで書いていらっしゃるように〔藤田2023〕、古代から、スピノザ、ライブニッツを経て、連合主義にまでいたる心身並行論の解題は、連合主義との対峙が私自身の大きなテーマであることもあって、そこにも深入りして、きちんと考えてみたい気持ちは強くあるのですが、今日はこの講義の後半ではなく、前半、凡庸化、動的図式、運動図式にテーマを絞って考えてみたいと思っています。

連合主義批判とカール・ヤスパース

図1でお示ししたのは、精神病理学者のカール・ヤスパースが行為的結合“*Aktsynthese*”という機構を説明する際に用いた図です。ヤスパースの『精神病理学総論』では、図はほとんどありませんから、ここで図示が行われているのは、ある意味相当力を込めてこの部分をヤスパースが書いたと想定できます〔Jaspers 1973 : 137〕。しかもこの本は初版が1913年で、ベルクソンの講義録と非常に近い時期に書かれたものです。この図は、マイネルトの連合的結合との違いを際立たせて、行為的結合を説明するために作成された図です。連合的結合とは、ベルクソンがこの講義録の第11講と第12講にまたがって、念入りに対峙しているあの連合主義です。この図では、図の段を上がる時に、要素がそのまま連合するのではなくて、新たな質が創発されることを示しています。行為的結合が解体する場合、むしろ病的状態として、隣接や類似と

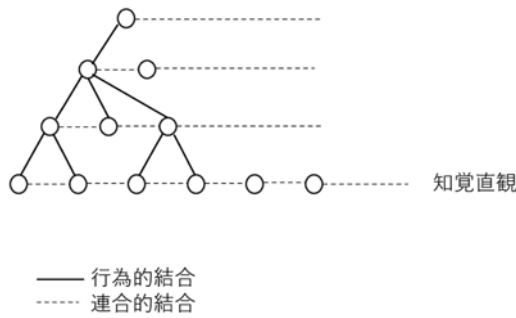


図1 ヤスパースの行為的結合

という連合的結合が活性化され、たとえば音に惹かれて無意味な連想が生ずる語音連合（「りんご」と言おうとして、「りす・りんざい・りんご、ろんご」などと言ってしまうなど）が脱抑制的に出現してしまうことが『精神病理学総論』では例として取り上げられています。行為的統合の解体を主要な症状とする病態として、アメンチア (amnesia) という病態が取り上げられていますが、これは連合主義と脳病理を結びつけたテオドル・マイネルトが取り出した病型です [Meynert 1890]。アメンチアというのは、一種の精神病で、かなり捉えにくい概念であるために、今ではほとんど使用されていませんが、非定型精神病という病態を示す人たちにおいてはしばしば見かける病像です。マイネルトは連合的結合の解体が、アメンチアの基底障害だと考えていました。しかし、ヤスパースはその考えと対峙する形で、行為的結合が解体した場合、むしろ連合的結合は過剰になってしまうのだと主張しています。行為的統合を、ベルクソンの縮約と重ね合わせて考えてみれば、有名な円錐の内部では、このヤスパースの図のように、幾重もの階層があって、その中で連合的結合ではなくて行為的結合が優位な形で円錐は通常は組みあがっていることとなります。こうした考えは平井先生の『世界は時間でできている』もそれと近いことが示されていると思うわけですが [平井 2022]、今回、私が特に注目したいのは、1列目から2列目への行為的結合が、2列目から3列目以降、あるいは n 列目から $n + x$ 列目への行為的結合と比べて一種の特権性を持っているのではないかという問いです。

1列目から2列目の行為的結合というのは、平井先生が感覚クオリアから志向的クオリアが立ち上がってくる非常に印象的な論考の中で述べられている機構に当たる部分です。これは完全に個人的な印象なのですが、フッサールとハイデガーが袂を分かった1つの急所は、この1列目から2列目への行為的統合に、それ以降の行為的統合とひき比べて特権性を与えるかどうかという点にあったのではないかという印象を持っています。フッサールは1列目から2列目の行為的統合に、知覚直観という用語を与えて、本質直観とは区別してそれに特権性を与たわけですが、ハイデガーは、そもそも私たちが意識することができる感覚というのは、生の感覚ではなくて、加工されて現象になってしまった感覚なのだから、知覚直観と本質直観を区別することには意味がないと考えて [竹田 1989]、1つにしてしまう方が誤解が少ないと主張した

というのが私の個人的な印象です。私たちの意識において十全な形で明晰に捉えられるのは、確かにハイデガーの言うように志向的クオリアだけなのは確かなことで、その点はフッサールも、同じように言っているわけですが、おそらくフッサールは未完了感覚クオリアの存在を強く意識し、未完了感覚クオリアと志向的クオリアを別の用語で区別しておくことは、譲れない1点だったのではないかというのが私の推察です。未完了感覚クオリア、あるいは事後的に決定されるのを待つ待機している感覚クオリアという概念は、平井先生の『世界は時間でできている』の中で取り出された非常に魅力的な概念で、フッサールが何に拘っていたのかをかなり明瞭に教えてくれるのではないかという印象があるのです。この未完了感覚クオリアが私たちの自由な想念に与える制約こそが、現象学が観念論に陥らないための重要な橋頭保であり、もしそうならば当然ここは譲れない1点となるはずです。そして物質が記憶へと立ち上がる最初の関門がここなのですから、ベルクソンにとっても1列目から2列目への立ち上がりは重要な急所になると思えるのです。

発生法則による再認と私自身の視覚失認例での体験

ベルクソンは、『講義録』において、再認の形式を3つ用意していました。もっとも感覚に近いのが先ほどの感覚クオリアが立ち上がる水準で、自動的（運動的・動物的）再認と呼ばれています。次が感覚クオリアから志向的クオリアが立ち上がる水準で、動的図式あるいは発生法則による再認と呼ばれている水準です。私の連続性を担保するのは、もっと長いスパンで、過去の出来事のエピソード記憶も連結され個人的再認と呼ばれている水準です。こうした個々の再認の水準は、下から上へと固定されたヒエラルキーに必ずしも硬直的に整除されているわけではなく、ヤスパースの図でいうならば、はるか上方のn次元の行為的統合であっても、時には最も最初の行為的統合（すなわち感覚クオリアから志向的クオリアへの縮約）とも相互に影響しあうこともあるような交互性を帯びていると考えられます。今回出版の講義録におけるベルクソンの最大の関心は、私という存在の連続性に関わる最後の個人的再認に向いている印象があり、これは精神病理学的にも非常に興味深い分析を含んでいますが、今回、私が集中して考えたいと思っているのは、最初に言いましたように2番目の水準、発生法則による再認についてです。

発生法則による再認の障害の例として、ベルクソンは、感覚としては見えているのにそれが何か見ただけでは分からない、しかもイメージとしてのそのものは分かっているという脳の障害（おそらくは脳梗塞とか頭部外傷などの物理的な損傷による）の事例をこの『講義録』でも提示しています。『物質と記憶』では精神盲と言っていたのを、『講義録』では新しく導入され

始めたという紹介とともに視覚失認という現代の神経心理学（この言葉もここ20年の間に時代遅れになってしまいましたが）を習ったことがあるものにはより耳慣れた用語に切り替えていくだけではなく、我々が純粹失読と呼ぶ事例とか、相貌失認と通常は呼ばれている事例など、『物質と記憶』で提示されている同様の事例よりもはるかに神経心理学的な事例としては現在でも違和感のないものが取り上げられています。

私自身にとっても、視覚失認の自験例は、私の思考の原点の1つとなっているものです。したがって、ベルクソンのこの『講義論』でのこの部分に関連する議論にはどうしても敏感にならざるをえません。ベルクソンは先ほどの再認の3つの形式のうちで、動的図式あるいは発生法則による再認の問題が視覚失認の問題だと言っています。ベルクソンはまた中和という言葉もこの再認を考える際に使っています。さらに凡庸化ともこの再認は関連しています。他方で、この再認は明らかに行為的統合であって、さらには物質から記憶への跳躍の肝である縮約でもあるはずで、今回考察したいのは、おそらくは同じプロセスを指差しながら、それぞれ微妙にニュアンスの違うこれらの用語において、ヤスパースの1列目から2列目への行為的結合のどのような側面がそれぞれ強調されているのかについてです。

まずは、私自身の立ち位置を明瞭にするために、自験例の視覚失認の事例をごく簡潔に提示しておくことにします〔兼本ほか 1986〕。この事例はこれまでも繰り返し提示してきたものです。

60代の大工の棟梁が左後頭部の脳梗塞を起し（図2）、その半年後にリハビリ目的で私のいた施設に入院して来られました。急性期が終わっていったん退院してからその施設に入院されるまで、孫に簡単なおもちゃを木工で作ってやることなどを含め、日常生活には問題なく、検査においても少なくとも言語性の知能は正常範囲でした。検査場面で目立ったのは、はさみとか、財布、鍵などの日常用品を見せても呼称ができず、りんごとかみかんといった食べ物類も一様にほぼ呼称ができなかったことです。ところが、

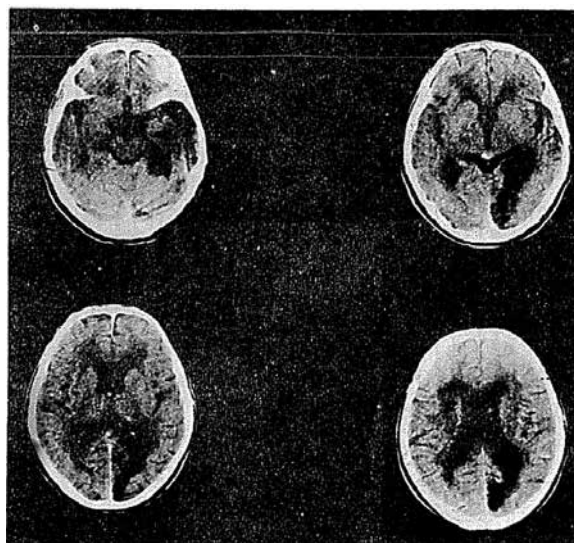


図2 CT画像（向かって右側が左。
左の後頭葉に陳旧性の脳梗塞の跡が見える）

鍵でも検者が少しでも音を立てると耳ざとく聞き取ってすぐに呼称可能になり、また手に取って触ってもらえば即座に呼称ができることでした。家の絵を検者が書いて、それを模写してもらうとかなり上手くかけていますが、ハサミを見てもらってその絵をデッサンしてもらうと、4本の線が書いてありますが何なのかは分かりません。それに対して、ハサミの絵を書いてくださいと言うと、自分の記憶から書いたハサミの絵ははるかにちゃんとしていて確かにハサミに見えました(図3)。また、なぜなぞをして、「主に紙や布を切る金属でできた道具は何ですか?」と尋ねると即座に「ハサミ」と答えることができました。

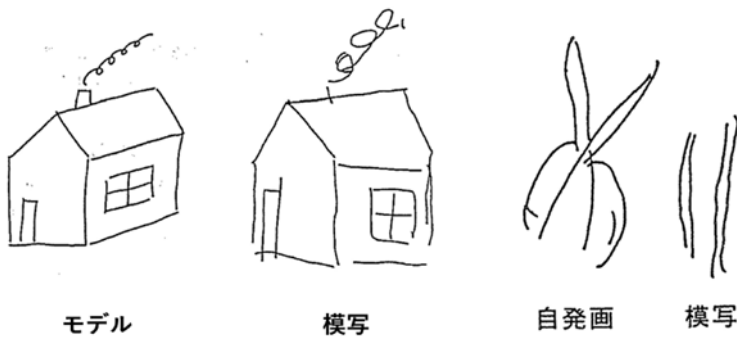


図3 視覚対象の模写(左側は検者の書いたモデルを被検者が模写したもの。右側は実際のハサミを見て模写したものと、自分の記憶を頼りにハサミを描いてもらったもの)



図4 仲間はずれテスト

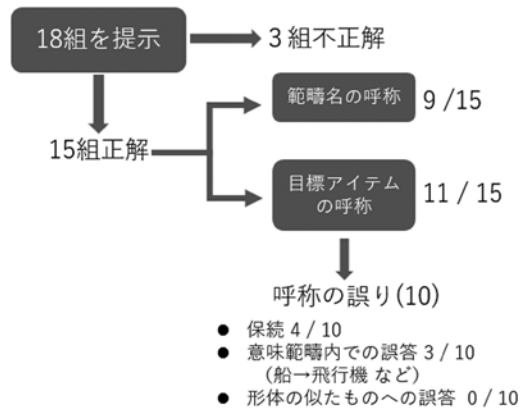


図5a 仲間はずれテストの結果



図5b 統合・範列-範疇形成テストの結果

ものを行いました。これはたとえば、仲間外れテストと同じような同じ意味カテゴリーにあるもの同士を組み合わせるのを範列的、目と眼鏡のように状況的にしばしば隣接して結びつきの強いものを統辞的と名づけてそれぞれ関係の深いもの同士を組み合わせてもらうテストです。結果は図5bに示したようになりましたが、特に統辞的範疇形成テストの組み合わせが正解した後の呼称において、興味深い結果がみられました。

1つのテストの結果を示します。注射器、包丁、ボール、野球選手、医者、台所の線描画をランダムに並べ、最初に提示しました。被検者はこれを正しく組み合わせることができました。ところが呼称をしてもらうと、Aの組（野球選手とボール）については、子供、ボール、Bの組（注射器と医者）は正解したものの、Cの組（包丁と台所）については分かりませんと呼称ができませんでした。さらにテストを繰り返すと、呼称ができた組に関してはその後、常に安定して正解できたのに対して、呼称ができなかった組については、しばしばいったん成功しても次の回には成功しないといったことが観察されました。さらに、「本当にこれで大丈夫ですか？」と正解した組について尋ねた場合、呼称ができたものについては揺らがなかったのに対して、呼称が不正解であった組に関しては、「絵が悪いので分からない」「違いますかね」といった確信の持てなさが表明されました。

さらに靴の線描画を提示した時に、「これは靴といえば靴のように見えますが、田舎の靴で、本当に靴と言っていいかどうか分かりません」といった発言があり、それが靴であることは認識されているにもかかわらず、自分が見ているものが靴だとは言い切れない不確実感を訴えることがしばしば見受けられました（ちなみに、提示した線描画は、普通の革靴のイラストです）

ベルクソンは85-86ページにかけて、言語聲と呼んでいる事例（これは先ほども触れましたが、現在では通常は純粹失読と呼ばれている事例です）を考察しつつ、動的図式という考えに注意を喚起しています。たとえば、私の事例では、曲がりなりにもハサミは見えていて、拙劣ではありますが、何かその感覚クオリアのようなものを感覚レジストリーに保持できていそうだという事は、四本線のデッサンからでも推察されます。こうした知覚を、静的知覚（perception

statique) とベルクソンは呼んでいて、しかしそこには動的知覚 (perception dynamique) とでも呼ぶべき媒介項が欠けていると主張しているわけです (87ページ)。実際の事例では、たとえば私が描いた線描画の家の模写のように、毎回上手くいかないわけではなくて、時に、上手くいく場合もあります。ベルクソンは、良く修練されて獲得されたダンスのステップに合わせて、動的図式がどのようなものかをさらに説明しています。ワルツが例にとられて、それは六つのステップで構成されていることが説明され、おそらくは習っている途中では、いわば静的知覚によって分析的に1つ1つ習得されるわけですが、最終的には有機的に1つにこれが統合されなければワルツを踊ることはできないことに注意が喚起されています。そしていったん各ステップが1つに統合されると、どこかの端緒が知覚されるだけで、一挙に全体が再構成されることとなります。失語・失行・失認と呼ばれ、ほぼ人間に特有の学習によって習得される高次脳機能全般の成立において、この動的図式の媒介が必要だとベルクソンはここで述べているのだと思います。そしてこの統合は、マイネルト的、連合的な加算ではなくて、ヤスパースの言っている行為的統合だということは間違いないことのように思えます。

少し脇道にそれますが、私自身の逆上がりと跳び箱の思い出のことを少し話しておきたいと思います。特に小学校3年か4年の時の跳び箱の時のことを良く覚えています。他の子供はだんだんとコツをつかんで上達して飛べるようになったのに、私だけは、次第に最初の段も飛べなくなって練習するほど下手になってしまいました。逆上がりについては、結局小学校と中学校はできるようにならず、高校になって懸垂逆上がりができるようになってこれを克服しました。懸垂逆上がりはクラスのかなりの子ができるようにならなかったというのにです。私は『ドラえもん』ののび太君のようないわゆる運動オンチあるいは今風にいうのであれば発達性協調障害という状態であったと今から考えると思うのですが、つまりは分析的に1つ1つの行為の断片に意識が介入してチェックと修正を行い始めると、1つの流れとして動的図式が形成されることが妨害されてしまい、かえって一続きの行為 (跳び箱を飛ぶ) が下手になってしまう (視覚失認の大工の棟梁のハサミのデッサンのように) 経緯が良く表現されている具体例ではないかと思うわけです。懸垂逆上がりは、動作の流れを有機的に1つのものに統合する必要はありません。筋力さえあればそれは可能です。おそらくベルクソンは、もしかするとワルツも上手い踊り手だったのではないのでしょうか。もしワルツを上手く踊れない運動オンチだったとしたら、視覚失認のような失敗した場合の解析をそこでも行ったのではないか思うからです。

発生法則による再認のもう1つの例、失行あるいはその関連障害

さて、発生法則による再認の例をもう1つ挙げてみたいと思います。失行と呼ばれる身振り

や行為に関わる障害で、98ページでベルクソンは取り上げていますが、道具の使用方法の失認と捉えていて、視覚失認との区別があまりはっきりしません。視覚失認の人の症状は視覚に限定されていますから、物品を触ってしまうと即座に使用することができるのが一般的です。日用品の使用だけが上手くできなくなり、これを一種の失認と捉えるのは、これから述べる Morlaās や De Renzi という人の考えになりますが [Morlaās 1928; De Renzi *et al.* 1982]、その場合でも一般的な視覚失認、つまりいわゆる精神盲は基本的には伴わないのが普通です。失行の主な2つの類型、観念失行と観念運動失行は、歴史的に錯綜していて非常に分かり難いので少し説明しておきたいと思います（表1）。

表1 観念運動失行と観念失行の歴史の変遷（IM: ideomotor apraxia, I: ideational apraxia, (i): 結果としてそうなるが強調されているわけではない）

	Liepmann (1900)	Morlaās (1928)	De Renzi (1968)	Signoret (1979)	Heilman & Rothi (1993)
動作の模倣		IM	IM		
運動性錯行為 (BPOetc.)				IM	IM
保続	IM				
意図的行為に際立つ	IM				
意味性錯行為	IM			I	I
実際の物品を使用	(i)	I	I		
系列動作	I				

この2つを整理するための1つの考えは、もっぱら道具の使用に際して現れる障害か、そうではなくてたとえば指で狐の格好を作ってそれを模倣してもらうような時にも障害が生ずるか
で分ける考えで、道具の実際の使用の方が観念失行、動作や仕草の模倣の方が観念運動失行と
考えるものです。歴史的には Morlaās や De Renzi が主張してきた考え方です。もう一方は、産
出される錯誤の質を問題にするもので、仕草の模倣であれ、道具の使用であれ、動作や仕草そ
のものの質が拙劣になるものを観念運動失行、歯ブラシを渡して使う真似をしてみてください
というと櫛のように歯ブラシを使って髪をすこうとするなど錯行為が出現する場合を観念失行
と呼ぶ考えで、Signoret や Heilman が主張している分け方です [Signoret *et al.* 1979; Heilman
1973]。この場合、身振りや動作の質そのものは保たれているのが基本です。この混乱は、失行
の概念を確立した Liepmann が、観念運動失行については、動作の模倣や単一物品の使用で産
出される動作が拙劣であることを強調する一方で、観念失行については複雑な系列動作におい

て産出される錯行為を問題としていて [Liepmann 1900]、いずれとも解釈できることに由来していると思われていますが、今回はこれ以上は深入りしません。本稿では、ベルクソンの動的図式との関係で使いやすい Signoret の考えに沿って失行と動的図式の関係について考えたいと思います。

私が神経心理学をやっていた20世紀の終わりはソシュールが一世風靡した時期で、Signoret の失行論は、その大きな影響を受けています。ソシュールの言語学では、言語学的に意味のある発音の最小単位を音素 *phonème*、意味の最小単位を形態素 *morphème* というように区切りましたが、これは物理的な音自体は言語学的に意味を持たず、行為的結合、あるいはベルクソンの用語をそのようにまで拡張して良いかどうかは分かりませんが、一種の縮約によって感覚クオリアが潰れて有機構成されて志向的クオリアとして仕上げられたものが音素になるという理解をしてみたいと思います。Signoret は、動作や身振りについてその応用を行ったといえます。たとえば私たちはハサミを使ったり、櫛で髪をとくときに、一々どのように使うか考えたりはしません。踊り慣れたワルツのステップと同じのように、ハサミを使う動作はすでに有機構成され、音素がそうであるように、1つのそれ以上分割できない単位となっていると Signoret は考えて、これを運動素 *kinème* と名づけたのですが、運動というよりは目的性のある行為が単位になっているという意味では、むしろ身振り素 *gestème* と名づけた方がより適切かもしれません。いずれにしても極端にいうと、華麗に跳び箱を飛べていたのに、おっかなびっくりの飛び方になってしまうのが、身振り素自体の形成障害になりますから観念運動失行に、跳び箱を飛ぼうと思っている時に、棒高跳びの飛び方をしてしまう錯行為が起こってしまうのが、観念失効に当たると考えると分かりやすいかと思います。当然のことですが、この考えでは観念失行の頻度は非常に低くなります。Signoret に近い考えで観念失行を考えると [Ajuriaguerra *et al.* 1960]、その頻度は左半球損傷を有する患者の5%弱程度になるのに対して、先ほどの De Renzi の考えだと30%弱となり [De Renzi *et al.* 1968]、実に6倍にもなるという統計もあります。

中和の問題と動的図式・運動図式

最後に中和の問題と関連して、本講義録で広義に用いられている動的図式と、『物質と記憶』で用いられている運動図式の関係について触れておきたいと思います。ドゥルーズは『ベルクソニズム』において、両者は厳密に区別しなければならないものとし [Deleuze 1966: 64, n. 3 = 2017: (8), n. 89]、平井先生の簡明な解説では、運動図式とは、外界に対象が与えられていて、その大まかな輪郭を描出してその後の具体的なイメージ投射に備える予備的な働きであるのに対して、動的図式は、具体的な言葉やイメージに落とし込む前の状態のアイデアであって、前

者がbottom-up的で感覚・運動的であるのに対して、後者は top-down的で、心理的で記憶に関わるものと解説されています [平井 2023 : 377]。そういう文脈でいうのであれば、たとえばワルツのステップや道具の使用、私の跳び箱や逆上がりなどは、運動図式と関係しているのでしょうか、純粹失読や視覚失認は動的図式の方になるでしょう。今回の講義録での中和の双方向的な働きを考える時に、動的図式においては、それを成立せしめた途上の個々の出来事が必要があれば再び現勢化させることが可能な形で潜在的に有機構成に組み込まれているという描出が非常に良く当てはまるのに対して、たとえばある道具の使い方を習熟した場合、その道具の使い方を練習している時の1つ1つのステップが先ほどの動的図式を構成する個々の出来事と同じように現勢化され、局在化させることができるかどうかということがあります。

この問題を考える上で、中和をどのように考えるかをもう一度復習しておきたいと思います。これについては、120ページのベルクソンの言葉を少し長めに引用したいと思います。美しいフレーズでもあります。「個人的な記憶は前進し、前進するにつれて自らを凝縮し、異なる記憶が混ざり合い、大量の類似した、しかし個人的な記憶が、互いに覆い合い、互いに干渉しあうことで、脱個人にして非個人的な記憶になる」。これが円錐の図において、S S'と書き込まれている発生法則、あるいは動的図式の説明です。同じことは、以下のようにもパラフレーズされています。

知性の深層から、潜在的で個人的で時間のうちに位置づけられた記憶 (mémoire) の深層から、諸々の記憶 (souvenirs) が出現し、それらが互いに結合し相互干渉することで非個人的なイメージや図式がもたらされます。潜在的な記憶から現実的な記憶への運動は、行動が及ぼす牽引力によって、行動の必要性によってすっかり説明されるのです。
[Bergson 2018: 130=2023: 120]

このように考えると、中和は、確かに運動図式よりも動的図式により良く当てはまるように思われます。たとえば犬なら犬、りんごならりんごをそれと私たちが同定しようとする時に、辞書的な同定とプロトタイプの同定の2つを区別することができます。たとえば「四つ足で歩く動物で、鳴き声はワンワンという」という定義をすると、大抵の人は犬だろうと答えるわけです。しかしこの定義では、交通事故で足が一本無くなってしまった犬がやってくるともうそれは犬とは言えなくなってしまいます。それから厳密に言えば本当に「ワ・ン・ワ・ン」と鳴く犬などおそらくはいないでしょう。それから着ぐるみを着た人が四つ足で歩いてワンワンと言ったらそれは犬でしょうか。ロボットの犬は、動物ではありませんから犬ではないことにな

りますが、でも、「あの犬の格好をした」とは私たちは言うでしょう。犬の形をしたビスケットはどうでしょうか。きりがありません。

これに対してプロトタイプの同定とは、私にとっては、一番最初におじいちゃんの家において、いつも私たちや家族の誰かが角を曲がって家に近づくと誰よりも先に聞きつけ小躍りして喜んでいてジョンという雑種の犬、ジョンはおじいちゃんと一緒に年を取り、おじいちゃんよりは長生きをしたけれど、最後は私たちの足音を聞いて立ち上がろうとするけれど立ち上がれなくて転ぶようになって、しばらくして死にました。それからムーミンという犬を実家で飼ったことがありました。ムーミンは馬鹿な犬で、知らない人についていってなくなってしまった。その馬鹿さが無性に悲しかったことを覚えています。それから女友達が飼っていたラブラドル。近所のシロ、小学校の時にヨウスケ君が噛まれてそれから犬に怯えるようになった黒い犬。やはり小学校の時に何匹か野犬の群れがいて、夕方怖かったこと…などなど無数の犬体験が中和され、そのメジアンは非個性的な「犬」の鋳型、動的図式として私たちのうちに有機構成されるのですが、しかし、「犬」の動的図式は、それがこれだと指さすことはできない潜在的な形でしかそれは存在していないのだらうと思います。いずれにしても少なくとも「犬」のうちに個々の犬のすべてが摩耗して1つになってしまい、出来事的な犬がそこからいなくなっていることはなさそうです。

では、たとえば「あ」という文字の場合を考えると、確かにこれとは違う中和の仕方をしていようにも思えます。あるいは先ほどの音素を例にとっても良いかもしれません。たとえば、rとlの違いを、いくら訓練しても私自身は聞き取れないことを英語の聞き取りの訓練を改めて40歳頃時から始めて発見したことがあります。結構長い文章を理解することはできていて、それでもそれなりの点数を取ることができるのですが、知らない固有名詞が出てくると一定以上の速さで読まれた場合には、rとlがランダムな確率程度にしか正解しないのです。音素は図式が出来上がっていなければ聞こえるようにはならず、しかも脳の物理的な可塑性とも関連していて、10歳を超えるとネイティブとしての運動図式の学習はもうできないような感覚運動的な実体だともいえます。こうして出来上がった図式も、その起源においては決して辞書的な定義によって（たとえば音の波長などによって）同定されているのではなくて、プロトタイプ的な様々のrを聞いて、そのrが中和され、メジアンとしてのrが獲得されるという仕方で有機的に仕上がっているのだと思われますからその点では動的図式と同じように発生したのではないかと思われます。しかし、他方で、たとえば犬のメジアンがそうであるように、必要とあれば常にそれを構成したもともとの日付のある出来事に遡れるわけではないように思えます。こう考えると、rを発音できるようになるために無数に繰り返されたrとの出会いは摩耗してしまっ

ていると考えて良いのでしょうか。そうするとやはりドゥルーズのいうように、運動図式と動的図式はまったく別のものとして区別すべきなのでしょう。

自分を捨てて他の女の人と出て行ったご主人が、その女の人に捨てられて戻ってきて、あまりに哀れでもう一度よりを戻した女性が、そのご主人を決定的に嫌になった時に教えていただいたことがあります。以前いつも彼はお風呂に入った後、いくら注意してもタオルをそのまま洗濯籠に入れずに投げ捨てていたのに、洗濯籠に入れるようになった。ご主人は無意識でそうしていたのだが、その無意識の習慣の変化が他の女と暮らしていたことをまざまざと想像させて、それ以降、わずかに変化したご主人の様々な仕草が一々目に付くようになり、ついには嫌悪感で今はとても一緒にはもういられないと思っています。そういうお話でした。あるいは、私は中学生の時にほんの少しだけフランス語を勉強したことがあります、フランス語のrの発音だけいくぶんか習得しました。実際にはフランス語はほとんど喋れないのですが、30代になってドイツに留学した時に、病院の内線でドイツ語で受け答えしていると、「あなた、フランス人？」とrの発音のせいで何度か言われたことがあります。つまりは日用品の使用とか、あるいは音素の発音とか、私たちの運動図式は、必ずとっていいほど偏りを持った形で凡庸化されていて、この偏りは、抗いがたいほど直截に私たちの日付を持った過去を指さしています。少なくとも先ほどの私の相談者の女性にとって、ご主人が自分を捨てて他の女の人と逃げたという額面通りのエピソード記憶は許すこともできれば、許容することもできたにもかかわらず、ご主人の仕草のうちに身体化されて残っている他の女との生活の痕跡は、ご主人とは何者かに関わる深みに到達する記憶、円錐のもっとも底面のRR'へと直接連なる何かとして受け取られていたに違いないように思えるのです。

ドゥルーズの理解では、運動図式は知覚の、動的図式は記憶の領分に属しており、知覚と記憶は別の機能である以上、当然両者を厳然として区別しなければ、ベルクソンの議論の全体が良く分からなくなってしまうという至極当然の指摘であったのだと思います。しかし、おそらく、知覚と記憶の境目は現実にはもっと入り組んでいて、個々の事象ごとに吟味しなければならないような多様さを持っているのではないかという気がします。最後にそのもう1つの具体例として最近の注意の研究を取り上げてみたいと思います。

注意においては知覚と記憶はごく入り組んでいる

近代的な注意機能の研究は、ブロードベントのフィルタ理論 [Broadbent 1958]、あるいは初期選択仮説に始まると言って良いかと思えます。並列的・無差別的に環境から（あるいは場合によって身体内部の臓器から）入力され感覚レジスタに入った刺激のうちで、必要なものを取

捨選択してフィルタする機能が注意だと考えるものです。有名なカクテル・パーティ効果（パーティの雑音に満ちた環境の中でも対面する相手の話だけをくっきりと聞くことができる）は、このフィルタ理論によってうまく説明することができます。

しかし、感覚レジスタにいったん登録された刺激は、意識に到達しない場合にも、様々の形で認知的な影響を及ぼすことが次第に明らかになり、ブロードベントのフィルタ説の有力な修正として登場したのが、トリスマンの特徴統合理論です [Treisman 1980]。特徴統合理論は注意を2段階の階層に分けて考えるもので、第一段階の注意が関わらない前注意段階で色や方位といった特徴が別々かつ自動的に分析されマップされ、第二段階で、別々に分析されてきたものが統合されるために注意が働くというもので、第一段階はfeed-forwardで並列処理、第二段階は再帰処理で、第一段階よりも厳しい容量制限があるため、最終的な選別が生ずることになります。対象のきちんとした（意識的な）認知、あるいは対象の世界への登録のためには、再帰処理が必要だと考えている点で、平井先生の志向的クオリアの成立と密接に結びつく考えだと思います [平井 2022: 202-205; 316-322]。第一段階は知覚の領域に、第二段階は記憶の圧倒的な圧力によって処理される領域となりますが、実際には相互の領域はお互いに浸食し入り組みながら現実を形作っています。

おわりに

ブナとケヤキが自然の中で合体してしまったスミクボと呼ばれる樹木があるそうです。これは木と木の合体ですから、知覚と記憶の関係のうまい比喻ではないところもありますが、おそらくは知覚と記憶はお互いに拮抗しないながら、様々の形で接合し、それぞれの場合に応じてその都度その配合や移り変わりの機構を考えなければならないような形で合体しているように思われます。まさに常に事例に対して謙虚であり続け、耳を傾け続けたベルクソンの姿勢を貫くことがそこでは思考をきちんと続ける上でマストであるところの講義録は教えてくれているように思えます。私自身は、動的図式が他者と共有される1つの名前前で括られたことが劇的な構造変化を人において起こしたのではないかという立場です。そして動的図式を1つの蝶番として、あるいはゲートとして、記憶が知覚につなぎ留められであることが、人間をその形に保つきものの部分の1つではないかと考えています。それについて展開することは今日はできませんが、このベルクソンの講義録を大きな共感と感銘を持って読ませていただきました。素晴らしい翻訳に心から感謝致します。

II-3. 兼本先生のご発表をめぐる質疑応答

藤田——どうもありがとうございました。非常に色々な論点があったと思いますが、とりわけ一番大きい論点は、先ほどの岡嶋さんの説明の中で「動的図式」という言葉と「運動図式」という言葉のずれ・揺れ・曖昧さという風に言われていたところを、むしろベルクソンの誠実さ、事柄に寄り添って捉えようとしているのだと解釈する点だったかと思います。それをご自身のこれまでの臨床経験や様々な理論と結びつける形で実に説得的にご説明いただき、誠に充実したご講演をいただきました。では、平井さんの本と関連するお話もたくさんありましたので、まずは平井さんからコメントをよろしくお願いします。

平井——いつもながら非常に刺激的な多くの論点がありましたが、特に今日の話で面白いところだなと思ったのは、やはり動的図式と運動図式ですね。僕も解説の中で少し書いたのですが、実はこの講義録で初めてあの二つの議論が混ざって出てくる。だから一見すると、従来の解釈を前提したときに、ベルクソン自身が混同しているように見える、見えてしまう、という点ですね。それを解釈者がどう考えていくか。これは今後、研究者たちの中でも進められていくべき、見届けられていくべき論点だと思うんですけど、それについてヒントになるようなアイデアをいっぱい出していただいたなと感じています。

とりわけ、個人的にすごく考えさせられたのが、記憶と知覚をどちらから見かっていうような観点ですね。逆円錐で言うなら、上の底面が記憶で、先端が知覚というふうに考えられていて、通常の説明だと運動図式は認識の場面で働くから、下の平面に位置付けられる。空間の平面に接している身体が環境と相互作用する中で我々が記憶をどう投入するかという時に出てくる話だと。それに対して、動的図式の方は、私たちがアイデアを下ろしてくるときに、それを具現化させる時に使われてくる概念だということで、その位置づけで考えがちです。ですが兼本先生のお話は、そういう位置の問題じゃないんだと。なんていうんでしょうね、そこで起きている、その動きに、どこから迫っていくかっていう「視点」の位置づけだと論じられているのが、すごく印象的でした。

どういうことかという、運動図式というのはやはり、典型的には視覚失認のケースからベルクソンが引き出してきた概念で、様々な障害の事例があって、そこからここで運動図式と呼ばれうるような装置があるはずだというふうにして、症例・事例の中から炙り出してくる。そういうプロセスの中で出てくるもので、だから言ってみれば外堀からそのメカニズムを探っていく、彫刻を外から掘っていくみたいに対象を絞り込んでいく、そういう手つきの中で出てき

た概念であると。それに対して、「知的努力」で展開される動的図式、schéma dynamiqueの方は、まさに何か発明する何かを発案するっていうその内的な動きを捉えているわけですね、内側から。その中でできた概念だから、哲学者がその問題に対して取っているアプローチの違い、視点の違いに注目するというのは、非常に面白い観点だなと感じます。そしてそう考えれば、両者が決して排他的でもないことがわかってくるだろうと。それが一つ一番大きい点ですね。

関連して、クオリアの話、拙著に言及しながらいろいろ挙げていただきました。注意的再認で記憶由来の成分を「志向的クオリア」と仰っていらっしゃったかと思いますが、他方で凝縮により感覚クオリアは常時実現している、それゆえ両者は混然と与えられるというのはご指摘のとおりで重要な点です。運動図式はパターン由来であっても、それが示唆するところから具体的にどんな記憶を探り当てるか、まさにそこが先ほどの動的図式と運動図式の絡み合いの論点だと。これは一回性と反復性の対比を安直に用いることへの批判として受け止めたいと思います。

あとは言語の問題ですね。言葉ができたことによって、ある種の頑健さ、安定さが出てくるんだけれども、それは他方で、靴なら靴にまつわるフリンジみたいなものをある意味では切除する働きでもある。藤田さんがいつも書かれていることですが、言語がもたらす精緻さと言語が切り捨てる精緻さとがあって、その両面性みたいなものを、ベルクソン研究の中で今後どう考えていくか [藤田 2022: 1428]、これは従来から兼本先生のお仕事から投げかけられ続けている問いなんですけど、今日のお話でも改めてありました。

あんまり長くなってはいけませんが、もう一点だけ最後に挙げておくと、習慣の話ですね。習慣によって身につけられたものが、むしろ夢の平面に到達する、深みに到達するという点ですね。これもまた考えさせられる論点です。ともすると習慣は身体的なもので、それが体に染み付いている、無意識に無自覚にある体の運動の形を作っている。それに対して円錐の底面にある記憶は、エピソード的な体験で、しかも現象的イメージとして現れる。そういう差異の全体として、習慣とは対比的に取られがちです。実際の人間の振る舞いの中では、個人のちょっとした仕草みたいなもの、その点Sと、その反対側のその底面Rがむしろ非常に密接な関わりがある、というお話ですね。考えてみれば、新たなアイデアの発明というものも、ベルクソン自身、無から湧いて出てくることを断固否定していますよね。むしろ徹底した事実への沈潜と聴診、問いと顔馴染みになるまでの長大な経験が作り出す記憶の地形（ランドスケープ）が、その地平の向こうにある何かを指し示す。動的図式のことを「指示indication」と呼んでいます。それは単に一回的なものではないが、既存のパターンに回収されるものでもない。そういう示唆をいただいて、これもベルクソニアンとしては、確かに、と思いつつも、どう

受け止めるか。非常に巨大な問いをいただいたと思います。引き継ぎ考えますのでまた捕まえてお話をさせてください。その際にはぜひお相手よろしく願いいたします。

藤田——頂点の、身体のところと、その底面と言われる記憶のところ、もしかしたらクラインのツボみたいな感じで繋がっているんじゃないかというね。そう考えてみると、今の事例なんかはいろいろ考えると出てくるんじゃないか、という非常に面白いご指摘だったと思います。次は岡嶋さん、お願いします。

岡嶋——私も今平井さんが指摘されていた論点に関して、同じような印象を持ちました。兼本先生が取り上げてくださった事例は、まさにこの講義でベルクソンが考えていたことに対応するものばかりだったと思います。特に図式概念についての考察は興味深かったです。先ほど、この講義の図式概念はあまりうまく位置づけられてないものとして捉えた方が良いのではないかと私は提案しましたが、他方で、あの一見したところ一貫性を欠くような説明というのも、もしかしたら、事実即して図式というものの位置づけようとしたがゆえに生まれたものでもあるかもしれない、そういう側面もあるのかなと、実際私も翻訳をしている間は感じていたことでした。兼本先生のご指摘は、知覚と記憶の境目の複雑さという現実、そのまま本書における図式概念の位置付けの曖昧さにつながっている、そういった理解の可能性を開くものであったと思います。

それから、もう一点、身体的な記憶についてのお話もとても魅力的なものでした。ベルクソンの記憶理論の枠組み、身体的記憶とイメージ記憶という二元論的な枠組みで扱いつらい事柄のひとつに、「知的努力」で扱われたような、身体運動そのものの記憶、言い換えると、運動感覚の記憶の身分の問題があると思います。『物質と記憶』では、人格性 (personalité) が、基本的にはイメージ記憶、あるいはその出所である純粹記憶に割り当てられていて、身体的記憶の方は、むしろ人格性を欠くものである、そういった排他的な構図がありますよね。先ほど取り上げられていたような事例は、むしろそうした二元論的な枠組みを解体するようなものに思います。運動的記憶それ自体の人格性という主題がベルクソンの理論の中にどう位置付けられるのか、私も今後考えてみたいと思います。ありがとうございました。

藤田——木山さん、天野さん、いかがでしょうか？

木山——非常に刺激的で、アイデアをたくさんいただきました。特に面白いなと思ったのが、

観念運動失行や観念失行に関するお話があったところで、私の理解が正しければ二つ種類があるとお話と受け取れるかと思います。つまり、片方は単純に仕草を模倣するのに対して、もう一つは、たとえば櫛を使うといったような、ある物の使い方を理解してその理解を行動に反映するというもの。このように「理解」と言えるようなものが間に入っているかどうかで区別されるのかなと考えました。そしておそらく後者の方が動的図式に近い何かに対応する、というような流れだったのかなと思います。ただベルクソンの場合、道具の使い方に関しても、本来の意味での記憶を介さないで身体的に再認して行為するという議論もします。そうすると二つの失行の区別の軸がベルクソンの場合と少しずれるところもあるかもしれないなと思いました。加えて、その話をされる時に出了たイデオモーターという単語も気になりまして、ベルクソンは現在と過去の違いについて、「過去は観念に過ぎないが、現在は観念-運動的である」[Bergson 2008: 71=2019: 92] と言うところがあります。さまざまな失行のメカニズムの議論と、現在・過去に関するベルクソンの議論とがどこまで対応するのか、自分でも考えてみたいと思いました。ありがとうございます。

天野——先生の挙げられた事例がすごく面白くて、この記憶講義と同じように具体例に即して考えることができ、刺激になりました。先生のご指摘で記憶と知覚の境界があやふやになって、そのことが運動図式とこの動的図式のあやふやさ直接関係しているのではないかという、そういった旨のご指摘があったと思うんですけど、それについては、確かにそうだろうと思いました。『物質と記憶』の時期（1896年）からこの記憶講義の1903年-1904年の時期にかけて、記憶と知覚の境界自体が、確かにベルクソンの中で少し見えにくい形が変わってきたのだろうとは思っています。そのせいで運動図式と動的図式という、前者は身体の働きを主とするもので、後者は精神の領域のものであるわけですが、そのあたりの線引きが曖昧になったのかなということ、改めて考えさせられました。ありがとうございました。

藤田——以上の応答に対して、兼本先生の方から何かありましたらお願いします。

兼本——こうして話をする機会を与えていただいたのは、すごくありがたかったです。時間がないと思ってぐちゃぐちゃと喋ってしまって、ちょっと本当申し訳なかったんですけど。

観念失行と観念運動失行の話をしたのは、基本的には運動図式として整理されるはずのものの中にもやっぱり記憶と関わっているとしか考えにくいものが食い込んできているという話をしたかったからです。注意の話をしたのも、最後に言っていたことと関係してるんです

けど、現代の注意理論でも、一番最初の感覚レジストリで入ってくる50ミリ秒以内ぐらいのところでは感覚刺激の選抜が終わってしまっているという初期選択理論が最初に主張されていたわけですが、後期選択理論とか知覚負荷理論がでてきて、再帰ループという意味が決定される150ミリ秒～500ミリ秒くらいの時間窓で起こる記憶と知覚のせめぎ合いが重要視されている。

注意の議論の中でもそのあたりがすごく揺れていて、最初のところでもうすでに知覚と記憶の部分というのは完全に分かれちゃっているんだという考えと、そうじゃなくて、知覚的な感覚のところのものがもう一回入ってきて、つまり少し保留になっていて、平井先生の未完了感覚クオリアみたいにして保留になっているものがある [平井 2022: 128-133]、それがまた後から記憶のほうと関連し合うんだみたいな、そういう説がその後の説なわけですが、知覚と記憶の境目というのか、物質と記憶の境目というのがいろんな場合に——例えば動作だったら動作、あるいは認知だったら認知で——それぞれに少しずつ揺らいだりしているんじゃないか。認知についてはベルクソンは、一番上のRR'のところまで行けちゃうんだみたいな話も書いてあるわけですけど（『記憶理論の歴史』、108ページ）。もちろん、認知の中でもそこまで行けないような、記憶がおそらくもう摩耗しちゃってるような視覚失認の場合もあるわけですが、でも逆に言うと、ベルクソンはそう直接には書いていませんが、動作的なものの上まで行っちゃうやつがあったりとかして。

だからやっぱり自分の理論は作っても、現実には本当にそうなんだろうかっていうことをベルクソンはすごく考え続けているので、彼の言葉がここで揺らいでるっていうのは、ベルクソンが首尾一貫してないんじゃないかって、その時点では知覚と記憶の境目がそういう風に見えたから、そういう言葉を使ったんじゃないかなという、そういう印象を持っているんですね。今みなさんからいただいたコメントを聞いて、いっそうそんな風に感じました。

藤田——講義録のこういった揺らぎがある部分をベルクソン研究者だけで読んでいたら、もしかすると「混乱してるよね」と単なるうっかりミスとして片付けてしまったり、著作の特権性を重視するあまり、「コレージュ・ド・フランス講義で著作とは異なるアイデアを練り上げようとしたけれど、結局あまりうまく行かなかったから捨て去ったんだ」と切り捨てて終わってしまったかもしれない。でも兼本先生はそこにすごく積極的な面を見ておられる。私たちはむしろここで、哲学者が生きて考えている部分に立ち会っているんじゃないか、と。ご自身のこれまでのご研究、とりわけ失行に関する研究の歴史に即してすごく見事に運動図式と動的図式の連関が孕みうる問題性を取り出していただいたので、それだけでも今回合評会をやってすごく良かったなと思っております。ここまででもすでに十分に盛沢山でしたが、まだ前半部分が終了したにすぎません。

休憩後は澤幸祐先生のお話を伺い、みんなで議論をしていきたいと思います。

Ⅲ-1. 澤先生のご紹介

藤田——ではもう御一方の「こうすけ」先生のターンに行きます。澤幸祐先生は専修大学人間科学部心理学科教授でいらっしゃいます。ご専門は学習心理学で、『手を動かしながら学ぶ学習心理学』といった編著や、『行動分析的“思考法”入門』といった翻訳を刊行されておられます。とりわけ最近著の『私たちは学習している——行動と環境の統一的理解に向けて』は、澤先生ご自身の『方法序説』といった趣があり、惹き込まれました。終章で話されていることを少し引用させていただきます。

生き物の心は、明確な境界をもって内と外に切り分けられるようなものではなく、あちこちに穴があいたような状態で、たえず何かが入り出しているもの、その穴のまわりではどこからが内側でどこからが外側かも判然としないようなもののように僕には思える。心とは閉じたものではなく、開かれたものとして捉えるべきなのではないか？

心理学、少なくとも行動の変化を扱う学習心理学という学問の中では、生き物あるいは個体や個人が存在している環境から、心とその機能を切り離そうという誘惑には抵抗するべきだと僕は思う。

生きた心について何かを言おうとするならば、そうした誘惑は敵のようなものだ。一時的に水槽から出すことがあったり、穴をふさいだことの影響を調べることがあったとしても、それによってもたらされるものは、本来の心の姿ではないのだと思う。[澤 2022: 290-292]

こういった理解もどこかでベルクソンとつながるところがあるような気がしています。先ほど兼本先生とPBJの関わりについてお話ししましたが、澤先生についても実はベルクソンに関心がおありになるということで、「ベルクソン×心理学」という勉強会を内々でさせていただいておりました。今回ぜひもう少し突っ込んで、さらにベルクソンについてお話を聞きたいということでご講演をお願いした次第です。では、澤先生、よろしくお願ひ致します。

Ⅲ-2. 『記憶理論の歴史』を学習心理学者が読む（澤 幸祐）

はじめに

私の専門は実験心理学、なかでも学習心理学や動物心理学と言われる分野であり、今回の主題であるアンリ・ベルクソンによるコレージュ・ド・フランスでの講義録『記憶理論の歴史』を含め、フランス哲学については全くの門外漢であることを最初にお断りしておかなければなりません。若かったころにヘーゲルの歴史哲学やドゥルーズ&ガタリの『アンチ・オイディプス』に返り討ちに遭うなど、哲学に対する漠とした憧れは持っていたものの、専門的な教育を受けたわけではありません。あくまでも門前の小僧であり、哲学のファンという程度の立場です。

とはいえ、心理学という学問はほかの諸科学以上に哲学との距離は近いように私には思われます。個人的な話ですが、関西学院大学で私の指導教員であった今田寛先生が親子二代にわたって翻訳した心理学に関する古典的教科書 [James 1892] の著者ウィリアム・ジェイムズはプラグマティズムの創始者でもありますし、「心の哲学」と呼ばれる分野は心理学の研究実践にも多くの影響を与えていると思います。哲学から離れて心理学という学問が成立したのだから、今更戻ることはないのではないかという意見もありますが、私の考えは違います。心理学から哲学的な、あるいは人文的な側面を取り除いてしまうと、とても味気ないものになってしまうのではないのでしょうか。

さて私とベルクソンの最初の出会いは、「『物質と記憶』 くらい読んでおくか」と気軽に手を出して見事に挫折するという、あまり幸福なものではありませんでした。半可通の私には、明確な定義なしにいきなり用いられる「イマージュ」という用語など、全く手も足も出なかったというのが正直なところでした。それからずいぶんと時間が経って、今度は『意識に直接与えられたものについての試論』（以下、『試論』）を手にする機会がありました。ご存じの通り、『試論』の冒頭では、当時勃興していた精神物理学、具体的にはウェーバーやフェヒナーといった人々が行っていた人間の知覚を物理学における長さや重さと同じように数量化して測定する手法に対する批判が展開されています。ここではその詳細は述べませんが、曲がりなりにも「科学的心理学」を標榜して人間や動物の研究をしつつも、同時に何とも言えない収まりの悪さを感じていた私はかなりの衝撃を受けました。科学としての心理学を支えている仮定が相当に強いものであることは認識していたものの、100年以上前の哲学者から改めて真っ向から批判されて相当な反省を迫られたわけでした。そこからベルクソンについて興味を持ち、著作をいろいろと読むようになり現在に至ります。ただし、現代心理学に対してベルクソンの与えた影響に

ついては、決して大きいものには見えないというのが正直なところで、教科書に名前が登場することもあまりありません。古い教科書には登場しますので、いわばロストテクノロジーとあったところでしょうか。

今回は『記憶理論の歴史』という心理学にきわめて近い題材に関する講義録を読んだわけですが、一言でいって大変に面白く読むことができました。「実証科学なしに可能な哲学はありません」(30ページ)、「何より難しいのは、現に生じている事実を人為的な再構成や再複合に置き換えてしまわないようにすることです」(92ページ)など、はっとさせられる記述にたびたび出会いました。「ある科学が、他の科学とのアナロジーによって構成されることなどありませんし、あるべきではない」(190ページ)という言葉からは、他の自然科学からいろいろのものを借り受けているような負い目のある心理学者としては、大いに励まされました。

こうした「テキストのつまみ食い」は哲学を専門とされる先生方からはお叱りをうけるでしょうが、私はあくまでも学習心理学者であり、ベルクソンの研究者ではなくベルクソンのユーザーという立場です。なので、今回はベルクソンの講義内容の紹介ではなく、学習心理学者がベルクソンをどう読んだか、学習心理学者がベルクソンの批判に対して何が言えるのかについて紹介していきたいと思います。

本講義録において中心的な話題は、表題にもあるように記憶であり、また注意に関しても多くの紙幅がさかれています。心理学において学習と記憶は隣接領域であり、私の専門領域とも大いに関係のあるところですが、例えば記憶と「弱められた知覚」の関係といった議論は、動物を対象とした連合学習理論研究において大きな論点になったことがあります。この話題に焦点を当ててもよいのですが、専修大学の紀要に2007年に掲載した私の論文〔澤 2007〕がありますので興味のある方はそちらをご覧ください。今回はどちらかというと注意に焦点をあてて議論したいと思います。

実験心理学における「学習」とはなにか

まず、私の専門である心理学のなかで学習とはどういうものなのかを紹介します。学習(learning)という言葉は、我々の日常生活のレベルでは「外国語を学習する」といったように、勉強することを指すように思われるかもしれませんが。心理学において学習とは、「経験によって生じる比較的永続的な行動の変化」と定義されることが一般的です。この定義に従うと、「勉強するという経験によってそれまでにできなかった外国語での会話という行動の変化が起こる」ということになり、外国語習得は学習の定義を満たします。スポーツの練習をすることで新しい技術を身につけることも学習のひとつです。一方で、過度の練習で疲労がたまり、それ

までできていたことができなくなるという行動変容は、疲労が取ればもとに戻ることから「永続的な行動の変化」とはみなされず、学習の定義を満たしません。同様に、加齢や発達に伴う行動の変化も、「経験に基づく行動の変化」ではないため、学習とはみなされません。このように、心理学における学習は伝統的には「経験に基づくものであること」と「永続的であること」、そして「行動の変化として検出・測定ができるもの」という特徴を持ちます。

一方で、最近の教科書では、こうした伝統的な定義の特徴を踏まえつつ、より包括的で有用な定義が提案されています。De HouwerとHughesによる教科書[De Houwer & Hughes 2020]によると、進化(evolution)が系統発生による環境への適応であるように、学習は個体発生のレベルでの環境への適応です。彼らは、環境への適応としての学習を、生活体を取り巻く環境内に存在する規則性(regularities)の帰結として生じるような観察可能な行動の変化ととらえました。例えば、「雨雲が出てくると雨が降る」というのは外部環境内に存在する規則性です。この規則性に基づいて、「出かけるときに雨雲をみると傘を持っていく」という行動がみられるようになれば、それは学習によるものと言えるでしょう。また、「雨が降っても傘を差せば濡れなくて済む」というのは環境と自らの行動の間にある規則性であり、「雨が降ると傘を差すようになる」という行動の変化が生じれば、これもまた学習といえます。

このように、最近の学習の定義を援用すると、学習は大きく「環境内に存在する規則性に基づいた行動の変化」と「環境と生活体の行動の間に存在する規則性に基づいた行動の変化」に分類することができます。この分類は、生活体の学習を支える代表的な実験手続きと対応させることが可能であり、環境内に存在する規則性に基づいた行動の変化は古典的条件づけ(classical conditioning)、環境と生活体の行動の間の規則性に基づいた行動の変化は道具的条件づけ(instrumental conditioning)とみなすことができます。

古典的条件づけとは、ロシアの生理学者イワン・パブロフによって発見された手続きであり、メトロノームの音とエサの対提示をイヌに対して経験させると、もともとはエサに対してのみ唾液分泌を行っていたイヌがメトロノームに対しても唾液分泌を行うようになるという現象です。古典的条件づけはその後、音刺激と電撃のような恐怖刺激の対提示によって音刺激に対しても恐怖反応が誘発されるようになるという恐怖条件づけや食物摂取の後に内臓不快感を経験することで食物への嫌悪反応が誘発されるようになるという味覚嫌悪学習のように、さまざまな刺激の組み合わせによって種を超えて生じることが明らかになりました。こうした古典的条件づけ手続きにおいて重要な特徴は、「メトロノームの音の後にはエサが提示される」あるいは「音刺激の後には電撃が提示される」といった環境内の事象間の関係に対して生活体の行動は影響を持たないということです。

道具的条件づけはアメリカの心理学者・教育学者であるソーンダイクが発見し、その後スキナーによって体系的に研究が行われた手続きです。ソーンダイクは、空腹な状態にあるネコを、設置された仕掛けに正しい反応をすることで扉が開くようになっている問題箱（puzzle box）と呼ばれる実験箱に入れ、脱出するとエサを得られるようにしたうえで、ネコが問題箱から脱出するまでにかかる時間を測定しました。その結果、ネコは問題箱に入れられた当初は脱出するまでに時間がかかるものの、最終的には正しい反応をすぐに行うようになり脱出するまでの時間が短縮することが見出されました。またスキナーは、レバーや反応キーとエサの提示口のついたオペラントチャンバーと呼ばれる実験箱を考案し、ラットがレバーを押したりハトが反応キーをつついたりするとエサを提示するという手続きを用いて、生活体の行動が変容する要因を検討しました。道具的条件づけにおいては、エサが提示されるかどうかは生活体の行動に依存しており、「レバーを押すとエサが提示される」といったように、生活体の行動と環境の間にある規則性に基づいて生活体の行動が変容します。

このように、古典的条件づけは「環境内に存在する規則性に基づいた学習」、道具的条件づけは「環境と行動の間に存在する規則性に基づいた学習」と分類することができます。古典的条件づけと道具的条件づけの区別については、刺激によって誘発される行動に関する学習を古典的条件づけ（あるいはレスポナント条件づけ）、自発する行動に関する学習を道具的条件づけ（あるいはオペラント条件づけ）とみなす立場もありますが、ここではこれ以上深入りしません。重要なことは、生活体が経験によって行動を変化させる際には大きく分けて2つの学習過程があるということです。これら2つの学習過程で、生活体がどのような知識を獲得するのかについては様々な仮説が提案されてきましたが、そのうちの一つが連合学習理論です。

観念連合批判

心理学、特に学習心理学において連合学習理論（associative learning theory）とは、ジョン・ロックやデイヴィッド・ヒュームに端を発するイギリス経験論を出発点とするアイデアです。彼らは人間の知識の源を経験に求め、観念間の連合によって複雑な知識が形成されると考えました。学習という、後天的な経験によって行動が変容していく現象を扱ううえで、経験論哲学は相性がよく、また連合という一見して単純な過程の積み重ねで複雑な行動変容を解釈するという姿勢は、モーガンの公準やオッカムの剃刀に照らしても受け入れられやすかったと思われます。特にヒュームは接近・類似・因果といった要因を連合の条件とみなしたとされています。なかでも接近の要因については、「対提示される刺激間の関係性の学習や反応と報酬の関係性の学習には刺激間や反応と報酬の時間的接近性が重要である」という実験事実も相まって、い

ろいろな哲学者によって重視されてきました。その結果、学習心理学において古典的条件づけや道具的条件づけは、「音刺激と電撃の表象間の連合」や「レバー押し反応とエサ報酬の連合」といったように、刺激や反応の間の連合によって記述されるようになりました。

本講義録においてベルクソンは、観念連合に基づいた心理学的な記憶研究に対してさまざまな批判を行っています。例えば、そもそも記憶を分析するために用いるものとしては観念連合という表現自体に問題があり、観念とはもっと抽象的なものであって、記憶と知覚とは別のものである、とされています（60ページ）。あるのは知覚による記憶の喚起であり、そこには観念も連合もない、というわけです。また、連合主義的心理学の誤りは「不動のものを並置していけば、いつか運動を再構成するに至るはずだと信じていることです」ともあります（186ページ）。実験的事実によっても支持されている、とさきほど述べた近接の要因についても、詳細に立ち入らないと断りつつも「連合があるとされる場所にあるのは、たいてい連合ではなく分離なのです」と述べています（202ページ）。ここで挙げた以外にも、ベルクソンはさまざまな観点から記憶研究を行ううえで観念連合という道具を使うことを批判していますが、詳細は本講義録そのものを読んでいただくことにして、学習心理学者なりにこうした批判に対してお答えしたいと思います。

学習心理学における連合

本講義録におけるベルクソンの連合主義心理学批判は、当然のことではありますがこの本講義録のもととなる講義が行われた1903年当時の心理学に向けられたものです。一方で、学習心理学者が行動変容の基本過程として取り上げる古典的条件づけはパブロフの研究がロシア語から英語に翻訳されて広く知られるようになったのが1927年、道具的条件づけについてはその出発点といえるソーンダイクの論文の出版が1911年と、実験的研究が本格化したのはベルクソンの時代以降です。もちろんこれらの研究以前から連合学習の研究は存在してはいましたが、現在よく用いられる標準的な実験手続きはパブロフやソーンダイクに依存するところが多く、ベルクソンが批判の対象とした観念連合というアイデアと現代の連合学習研究との間にはギャップがある部分もあります。

学習心理学、特に連合学習理論研究において、連合という用語はヒューム以来の連合主義哲学における連合とはいろいろな面で異なる使い方がなされています。例えば音刺激と電撃を対提示することで恐怖反応が学習されるという古典的条件づけを例にとります。連合という結びつきが形成されるのは「音刺激」および「電撃」という事象の内的表象（inner representation）の間ということになります。表象という用語も多くの議論があるところですが、ここでは音刺

激や電撃といった外部環境内の事象の内的表現というくらいの意味で、生活体が音刺激を提示されると音刺激の表象が、電撃を提示されると電撃の表象が内的に活性化され、この表象がさまざまな内的処理や行動を引き起こすと考えられます。こうした表象の間に連合が形成されるわけです。

この連合には（一部の理論で例外はありますが）大きく分けて2種類が仮定されており、先の例でいうと「音刺激の表象が活性化されることで電撃の表象も活性化される」というような連合を興奮連合（excitatory association）、「音刺激の表象が活性化されることで電撃の表象が非活性化される」というような連合を抑制連合（inhibitory association）と呼びます。いってみれば「音刺激が電撃の到来を予測する」という状況においては音刺激と電撃の間に興奮の連合が形成され、「音刺激が電撃の非到来を予測する」といった場合には抑制の連合が形成されると考えられています。こうした連合は結びつきの強さ、連合強度（associative strength）をもっており、興奮の連合強度が強いほどより強く表象が活性化し、抑制の連合強度が強いほど表象の活性化が強く抑制されます。こうした仮定を踏まえると、連合学習理論とは「どのような状況下でどの表象とどの表象の間にどんな種類の連合がどの程度の強さで形成されるか」という連合的知識の獲得と、「形成された連合のネットワークに従ってどういう行動がどの程度の強さで表出されるか」という知識から行動への変換に関するルールを定めるものといえます。この枠組みに従って、連合学習理論の研究では連合形成の条件に相当する環境内の要因や生活体の内的計算過程について様々な実験的研究が行われてきました。その結果、先ほども述べたように、たとえばヒュームのいう近接の要因については連合形成において重要な役割を果たすことが示されてきたわけです。

こうしてみると、ベルクソンによる「記憶の喚起は知覚によるものであってより抽象的な観念の連合とは別である」という批判は、出発点の違いに起因しているように思われます。多くの連合学習理論においては、知覚経験によって生じ、記憶として貯蔵される表象間に形成されるものを連合と呼んでいるわけですから、ベルクソンが批判する「連合」と連合学習理論が仮定する「連合」とは別物である、ということになってしまいます。一方で、ベルクソンは「連合主義の哲学は、この『連合』という語の曖昧さ、すなわち二つの観念が連合される働きに大幅に依拠している」（61ページ）と述べています。ここで取り上げられている「連合」は観念連合のことですが、連合学習理論における「連合」も、よく言えば柔軟に、悪く言えば曖昧に使われている節があります。ここでいう柔軟さは、より幅広い現象を説明するためにはある程度必要なことでもありますので、後で改めて議論したいと思います。

「連合主義的心理学の誤りは、不動のものを並置していけば運動を再構成できると考えるこ

と」という批判についてはどうでしょうか。私の眼には、ベルクソンは一貫して意識の生成過程、動的な側面を重視しているように映ります。心理学における学習が「行動の変化」と定義される以上、動的な変化を扱うのは当然のことではあります。しかしながら、実験的研究という制約から、動的な側面を十分に考慮できていないという批判は十分にありえます。

学習に関する実験的研究において標準的な手続きは、「人間や動物に対してなにかしらの経験をさせ、経験の前後での行動の変化を比較したり、経験の有無・種類などを操作した群の間で最終的な行動の違いを比較する」といった手法がとられます。たとえて言うならば、英語を勉強するという学習のメカニズムを検討するために「単語重視」「文法重視」のように勉強方法を変えた群を用意しながら、勉強前と期末テストの成績とを比較したり群間で期末テストの成績を比較したりする、ということです。ここでは「単語を重視して勉強しているまさにその瞬間」を扱うことはできません。つまり、標準的な学習研究の行動学的手法においては、学習という現象は「経験を積み重ねてできあがった最終的な生産物」を通して検討することになり、時々刻々の変化を追いかけることは容易ではありません。もちろん、期末テストまでに小テストを挟むように学習経験の途中経過を調べることは可能ですし、行われてもいます。しかしそれでも、絶え間なく流れているはずの時間を無理やり停止させて輪切りにしていることにはかわりないわけで、ベルクソンのいうように「不動のものを並置していけば運動を再構成できると考える」という誤りを犯していることには変わりないでしょう。

行動指標によってこうした生成変化を直接扱うために、「一定時間あたりのレバー押しの回数」のような時間的な厚みを圧縮してしまう指標ではなく、実験場面における動物の行動を動画に収めてリアルタイムの行動変容を追いかけるという試みも行われてはいます。また、実験セッションや試行で輪切りにするのではなくリアルタイムの変化を記述するような数理モデルを用いるという研究もあります。それでもやはり、時間の流れの中で相互浸透しながら途切れることなく生成されていく過程を追いかけることは、現在の連合学習理論では十分に行えていない、というのが現状だと思います。

注意と分離

次に、「連合があるとされるところにあるのは、たいてい連合ではなく分離である」という記述について検討してみます。この文言から想起されるのはシモヌ・ヴェイユもリセでの講義録 [ヴェーユ 1996] のなかで「観念連合論者の誤りは、観念がお互いに収斂すると考えたことです。観念はお互いに拡散していくのです」と述べていることですが、こうした批判は私には注意、特に連合学習研究において行われてきた注意研究と関連があるように思われます。

「注意は誰でも知っている」というのはウィリアム・ジェイムズという言葉ですが、確かに我々は「注意を払う」「注意を怠る」といったように日常的に注意という言葉を使っています。心理学において注意（attention）という言葉は、主に認知心理学において意識と並ぶ重要な対象として多くの研究が行われてきましたが、学習研究においてもさまざまな研究があります。

学習分野における注意研究の古典として1949年に発表されたLawrenceによる研究を紹介します [Lawrence 1949]。この研究では、ラットは「明るくて狭い部屋」「暗くて広い部屋」のように「明暗」「広さ」といった複数の特徴次元を持つ部屋のあいだの選択を迫られます。正解の部屋を選べば報酬としてエサが与えられます。このとき、例えば「明るい部屋を選べば正解」といったように明暗の特徴次元が正解と関連しており、広さの次元は正解とは無関係であるように設定して訓練を行うと、ラットは明暗に従って正しく行動選択できるようになります。次に、先ほどとは異なる場所で、同じく「明暗」「広さ」の特徴次元を持つ部屋のあいだの選択をするテストを行います。ここでラットは2つの条件に分けられ、一方の条件では訓練において正解を示していた明暗の次元が今回も正解を示し、もう一方の条件では訓練時には正解とは無関係だった広さの次元が正解を示すように設定されます。そうすると、訓練とは異なる状況でテストを行っているにも関わらず、訓練において正解を信号していたのと同じ特徴次元でテストした条件では正解を早く学習し、訓練時には正解と無関係だった特徴次元が正解を信号する状況でテストされる条件では学習の成立に時間がかかるという結果が得られました。

この結果から、「ラットは正解を信号する特徴次元に注意を向けるようになり、正解とは無関係な特徴次元を無視するようになる」という解釈を行うことも可能に思えます。一方で、我々が「注意を向ける」という言葉で表現しているものと同じ内的過程をラットが持っている保証はなく、「注意」という言葉を適切に定義して利用する必要があります。この研究においてラットが行っている行動は「2つの選択肢から1つを選ぶ」ということであり、その際に正解を選ぶための手がかりが明暗や広さといった特徴次元として設定されています。つまりラットが行っているのは、明暗や広さといった特徴次元のなかから正解に関連する次元に対して行動を割り当てるとのことだと考えられ、我々が「注意」と呼んでいるものは「環境内に存在する複数の特徴次元の中から適切なものに適切な行動を割り当てること」とみなすことができるわけです。

生活体は、与えられた刺激環境のなかでより多くの報酬を得るために行動するわけですが、「刺激Aにはこの行動、刺激Bにはべつの行動」というように刺激環境に対して異なる行動を割り当てる作業を弁別（discrimination）と呼び、別の行動を割り当てることができた際に「刺激を弁別できた」とみなします。こうしてみると注意とは、弁別のための手がかりを学習する

過程といえます。ワインのソムリエを例にとってみましょう。優れたソムリエは、素人には区別がつかないような微妙なワインの風味の違いを区別することができます。これは、素人は風味Aと風味Bに対して異なる反応を割り当てることができないが、優れたソムリエにはそれが可能だということです。優れたソムリエは、なんらかの方法で知覚的に類似した複雑な刺激のもつ微妙な違いに対して異なる行動を割り当てることができるわけで、学習心理学はこうした学習を特に知覚学習（perceptual learning）と呼びます。

知覚学習についても連合学習理論は一定の説明を与えています。バルクソンのではないことを承知のうえで連合学習研究における仮定を紹介すると、まず複雑な刺激の表象を考える際に、その刺激に特徴的な固有要素とほかの刺激と共有される共通要素を考えます。例えば固有要素をA、Bとし、共通要素をXとすると、ワインAの表象はAX、ワインBの表象はBXと置くわけです。それぞれのワインに特徴的な要素がAとB、両方のワインに共通する要素がXです。そしてAXとBXという二つの類似した、しかし異なるワインを繰り返し味わうことで、「Aが提示されるときにはBは提示されない」「Bが提示されるときにはAは提示されない」という経験をするようになります。AとBを同時に経験すると「Aが提示されるとBも提示される」ということなので要素Aと要素Bの間には興奮連合が形成されますが、今回の例であれば、要素Aと要素Bのあいだに先に述べた制止の連合を形成することになります。結果的に、ワインAを味わって表象AXが活性化すると表象Bは抑制され、またワインBを味わう際には表象Aが抑制されて、それぞれのワインに固有の要素と反応の間の適切な割り当てを支えることになります。このような相互制止のメカニズムは、動物の行動研究で実証的に示されています。

さて、この議論の出発は「観念は連合によって結びついたり群れを成すのではなく、むしろ拡散する」という主張を注意に関する研究から検討することでした。連合というものが観念同士の結びつきを強める、複数のものを一つに組み合わせるということであれば、「結びつく」「群れを成す」という表現は適切でしょう。しかしながら、こうした批判の対象となっているのは連合のなかでも興奮の連合、あるいは興奮の連合のみですべてを説明しようとする立場のように思われます。心理学における連合学習理論研究では、理論ごとの違いはあるものの、興奮連合のみですべてを説明するわけではなく、興奮連合と制止連合の組み合わせによって複雑な現象を説明しようとします。もし興奮連合が「観念が群れを成す」ということに対応するならば、制止連合はいわば「観念が拡散する」ということになるのではないのでしょうか。

注意とは「環境内に存在する複数の特徴次元の中から適切なものに適切な行動を割り当てること」と述べました。そうしてみると、ソムリエがワインの複雑な風味を弁別することは、注意という機能の帰結のひとつと言えるでしょう。興奮の連合によって「観念が群れを成す」の

ではなく、制止の連合によって刺激の要素が弁別しやすくなる、つまり「観念が拡散する」ということであれば、ベルクソン（あるいはヴェーユ）が批判した「連合によって観念が群れを成す」というアイデアを、連合学習理論研究は「群れを成す」だけではない過程を導入することで対応してきたように思われます。もちろん連合学習理論はベルクソンの批判にこたえるべくこうした歩みをしてきたわけではありませんし、すでに述べたようにベルクソンの念頭にあったであろう観念連合と連合学習心理学における連合との間には相違がありますが、結果的にベルクソンが指した方向に連合学習研究は進んできたようにも私には思えます。

連合学習研究の実例

ベルクソンによる観念連合論批判と心理学における連合学習理論の関係について、ここまで注意を題材に見てきましたが、次に私が過去に行った空間学習に関する研究を紹介したいと思います。学習とは経験によって生じる行動の変化、あるいは環境や環境と生活体のあいだにある規則性に基いた行動の変化でした。生活体は学習によって適応的な行動を身につけ、時々刻々変化している環境内で適切な行動選択を行っており、例えば「どこでエサが得られるか」「次の講義の場所はどこか」といった空間情報についても学習することができます。

例えば、私の職場は向ヶ丘遊園という駅から山を登った場所、専修大学生田キャンパスで、通勤のために向ヶ丘遊園駅から大学まで移動しています。向ヶ丘遊園駅までは電車で移動していて、隣には生田駅があります。つまり私は毎日、「向ヶ丘遊園駅から大学」と「生田駅から向ヶ丘遊園駅」という空間内の移動を繰り返しています。ここで、向ヶ丘遊園駅が事故などで使えなくなったとしましょう。私は生田駅から大学まで移動できるでしょうか。向ヶ丘遊園駅から大学までの空間関係と生田駅から向ヶ丘遊園駅までの空間関係がわかっているならば、数学的には空間ベクトルの加算によって、生田駅から大学まで実際に移動したことがなくとも、その方向や距離はおおよそ推定することができます。

このように、すでに経験済で空間関係を把握している複数の情報を組み合わせることで、実際には経験していない場所の間の空間関係が推定できると大変に便利です。私はこの問題について、かつてハトを用いた実験を行いました [Sawa, Leising and Blaisdell 2005]。この実験ではまず、タッチスクリーンをつつけばエサがもらえるという予備訓練を行ったハトに対して、タッチスクリーン上に2つの視覚的目印、ランドマークを提示します。ある試行ではランドマークAとBが少し間隔をあけて左右に並んで提示され、別の試行ではランドマークCとDが同じく左右に並んで提示されます。この訓練の目的は、ハトに「ランドマークAの少し右にランドマークBが提示される」「Cの少し右にはDが提示される」という空間関係を学習してもら

うことです。続いて、ランドマークAとランドマークCを画面に提示しますが、今度は「ランドマークAのすぐ右をつつけばエサが与えられる」という状況設定をします。ランドマークCについては同時に画面に提示されていますが、エサを得るために反応すべき場所、いわばゴールはランドマークAの右隣であり、ランドマークCはゴールの位置とは無関係です。この訓練を行うことで、ハトはランドマークAの右隣をつついてエサを得ることを学習します。

テストではランドマークBのみが提示される試行とランドマークDのみが提示される試行を用います。さきほどの私の大学についての空間関係の例に照らすと、もしハトが「ランドマークAのすこし右にランドマークBがある」「ランドマークAのすぐ右がゴールである」という空間関係を学習し、これらの空間情報を統合することができれば、ランドマークBのみが提示された場合にはランドマークBのすぐ左（ランドマークAとBの間）がゴールであると推論し、その場所に反応するはずですが。実際、テストの結果ハトはランドマークBのすぐ左に多くの反応を行うことが示されました。同様の結果はラットを用いた時間関係の学習においても示されており、「複数の刺激を経験した際に形成される連合のなかには時間や空間の情報が符号化されている」と解釈されています。この意味でも、ベルクソンが批判した観念連合と連合学習理論研究が仮定する連合のあいだには隔たりがあることがわかります。

では、ランドマークDを提示するテストの結果はどうなったでしょうか。ハトはランドマークCとDの空間関係は学習していますが、ランドマークCはゴールの位置についてなんの情報ももっておらず、ランドマークDからゴールの位置を推定するには情報が足りません。従って、ハトは特定のどこかをつつくのではなく、ランダムな反応をするように思われます。しかし結果はそうはならず、ハトはランドマークDのすぐ右に対して多くの反応を行いました。論文のなかで私は、どうしてもこの結果をうまく説明することができず、苦し紛れに「ランドマークAのすぐ右にゴールがあった経験が最も多いので、ランドマークAからの刺激般化が生じた」といったような解釈を書きました。この解釈自体はそこまで大きく間違っているとは思っていませんが、やはりじっくりこないとこが残っていました。

そんな中で、本講義録に示唆的な記述が見つかりました。ベルクソンは本講義において注意における創造的側面を議論する際に「記憶は自らを単純化し、現実の状況において利用され挿入されうる部分だけを、現在の知覚に対して提示します」(p. 155)と述べています。記憶から注意を通じて知覚へという能動的で創造的な議論ですが、ハトの研究結果に照らすと、「どこがゴールなのか十分に情報がない場面に置かれたハトにおいて、ゴールの位置に関する記憶が単純化され利用されうる部分だけが提示された」と読み替えることができます。提示された刺激状況を出発点として解釈するとランダムな反応になる結果しか予測できなかったことから整

合的な解釈を考えるのに苦労したわけですが、記憶と注意の能動性をうまく組み込んでおけば、よりよい解釈が生まれていたかもしれません。これもまた「テキストのつまみ食い」というお叱りを受けるかもしれませんが、100年の時を経てベルクソンの言葉から実証実験の解釈のヒントが得られるというのは興味深いことだと思います。

おわりに——ベルクソンの心理学の可能性

『記憶理論の歴史』という講義録を連合学習研究者がどう読んだか、どういう示唆があったかについて述べてきました。すでに紹介したとおり、ベルクソンという哲学者が現代心理学において占める位置は決して大きくないというのが実情ではありますが、その一方でベルクソンが心理学、特に実験心理学に向けた批判の多くは現代にも通じるところが多いと思います。「試論」において展開された精神物理学批判、さらに言う心理学的測定に対する批判は、まさにこの数年のあいだに相次いで表面化した心理学的研究の再現可能性問題とも関係するところもあります。

そもそも何かを測定するという行為は、測定という操作と測定する対象の属性が相互参照する構造になっています。重さをはかるために定規を使うのは不適切ですし、長さを測定するために天秤を使うことはできません。あえて「重さをはかるために定規を使う」ためには「長さが増えれば重さも増える」という対象のもつ性質を仮定する必要があります。測定対象の属性についてある程度理解し、そこになんらかの仮定を導入しなければ適切な測定はできないわけです。翻って心理学は、適切な測定を行うために必要な準備ができているでしょうか。私の個人的な感想としては、相当に危うい状況にあるように思います。

学習心理学、特に古典的条件づけ研究の歴史をたどると、ドイツ観念論や生氣論に対するカウンターアクションとしての側面があります。つまり物理化学的な因果関係のなかに人間や動物の行動現象を置き、形而上学的な側面を排除しようという流れです。しかし皮肉なことに、排除しようとした形而上学的な側面、あるいは心の存在論に関する議論なしには、「どうやって測定するのか」という問題について適切な第一歩を踏み出せないはずなのです。心理学はここで、物理学や化学の存在論を借りてきた側面があり、これが間違いだったかは何とも言えませんが、少なくとも唯一のやり方だったわけではないと私は考えます。

ベルクソンは本講義録でも、科学における形而上学の役割、形而上学者の務めについて議論しています（224ページ）。心理学には心理学の形而上学や存在論が必要で、「心の哲学」と呼ばれる分野でそうした議論が行われていますが、中でもベルクソンが主張するような方向性を踏まえた心理学、それも思弁的なものではない実証的な心理学の体系も可能だったのではないかと

ありえたはずのもう一つの心理学になったのではないかと私は考えています。繰り返しになりますが私は実験心理学者であって哲学者ではありません。あくまでも哲学ファン、ベルクソンユーザーです。いろいろな方の手を借りつつ教えていただきながら、ベルクソンを出発とした来たるべき実証的心理学の世界を作っていければと思います。

Ⅲ-3. 澤先生のご発表をめぐる質疑応答

藤田——またまた大変刺激のお話をいただき、ありがとうございます。仮にベルクソンの観念連合批判の要諦が「興奮連合のみですべての現象を説明しようとしている」という点にあるとすれば、興奮連合と制止連合の組み合わせで諸現象を説明しようとする現代の連合学習研究は、ベルクソンが指した方向に歩みを進めていると言える——注意には制止・分離・拡散による注意もあるというお話も非常に面白かったですし、澤先生ご自身がおよそ二十年前にされた実験を振り返り、事実解釈について当時納得のいかなかった点が、今回『記憶理論の歴史』を読んだことで、記憶と注意のベルクソンのな能動性に示唆を受け、より満足のいく再解釈に到達できたというお話もとても示唆に富むものでした。最後のベルクソンの心理学の可能性、来たるべき心理学というお話も——ベルクソン自身、来たるべき生物学、来たるべき医学、来たるべき心霊科学など、しばしば「来たるべき科学」という構想を口にしているだけにいっそう [cf. 藤田 2022: 406-407] ——興味深く伺いました。では早速、応答者の方々からのコメントをいただきたいんですけども、今度は岡嶋さんから行きましょうか？

岡嶋——お話ありがとうございます。冒頭の「ベルクソン・ユーザー」という表現が非常に印象的でした。科学と哲学の協働や、先端の科学と哲学の接続といった試みは、科学の立場から哲学をただ非難するだけになってしまうか、あるいは、哲学的主張に何らかの意義が見出される場合でも、この発想は現代の科学のこの考え方に似ている、といった程度の解像度で終わってしまうことが多いように思います。ベルクソン研究で言えば、例えば、90年代に神経科学との対話がなされることがありましたが、あまり生産的な議論にはなっていないのではないかと私は思っています。そういう観点から考えると、澤先生のお話は、哲学と科学の大雑把な比較では決してなく、個別の事象のレベルでたしかにベルクソンが言うことが、現在の連合学習と同じ方向を向いているといることがよくわかって、非常に刺激的なものでした。

実際、さきほどのお話は、講義録で取り上げられている事象の解釈に用いることができるものであるように思いました。後半でなされていた、知覚学習における分離についての議論のこ

とです。現在の連合学習理論では、多くの共通要素を経験した後で、それが無視、抑制されるという事態が生じているというのが、一般的な見解だというお話がありました。第5講でベルクソンは、フェンシングを見る、プロのフェンシングの選手の動きの巧みさを知覚するという事例を、図式概念を用いつつ取り上げています(96-97ページ)。図式の話は措くとして、そこで強調されているのは、上手さを見抜くには、自分がある程度その運動を経験したことがなければならぬ、もちろん、選手のような動きができる必要はないけれども、わずかでも経験なければ、動きの良し悪しはわからないだろうという事実です。あの解釈をさきほどのお話につなげることができるのであれば、選手の動きのうち、自分が再現できるような部分、選手の動きと類似している部分は無視、抑圧されて、その結果、類似していない部分だけが強調されることになる。その部分が、選手の動きの巧みさだ、というような理解ができるのではないかと。

それから、もう一点、最後にご紹介いただいたハトの例について一言だけ。ベルクソンはこの講義録の中(98ページ)でも、『物質と記憶』でも、動物の再認を基本的には、自動的なものであると考えています。動物の認識のあり方をかなり雑に抑えている節があると私は思うのですが、お話を聞いて、ベルクソンの意味での注意的再認を、そこまで高等でないような動物にも認めることができるのではないかと、あの実験をそのように解釈することも可能ではないかと、考えていました。ありがとうございました。

藤田——木山さん、天野さんはいかがでしょう？

木山——興味深いお話をありがとうございました。特に面白いと思ったのが、中盤あたりで連合の話を書かれるときに、「制止」というものを重視し、そこに注目した実験があるというお話です。この問題はベルクソンの発想と近いのではないかと感じました。彼も連想や想像といった働きについて、ほっておくとふわふわと飛んでいくので、いかに再生される記憶を制限して関係あるものだけに限るのか、限定するのが重要な問題だとしています。つまり、「何を引っ張ってくるか」ではなくて「何を出てこないようにするか」が重要だ、ということです。「生への注意」についての議論などがそうです。これはまさに先ほどの言葉遣いであれば「制止」にウエイトをおいた問題の立て方です。ただ、そういった話をする時にベルクソンが付け加える前提として、記憶の全体が(比喩的な言い方かもしれないのですが)圧縮・凝縮されながら、全体として前進していく、と言ったようなややレトリカルにも聞こえる発想があります。冒頭で岡嶋さんが紹介してくださったところでもあったかと思いますが、ベルクソンの場合、記憶の「全体」が常にあるという発想があるのです。だからこそ「制止」が必要になるわけです。

この発想には、なんと言いますかベルクソンの変わったところ、面白いところがあるのかなと感じました。

藤田——「減算的」と言ってもいいような部分ですよ。

天野——動物ということに関して言えば、ベルクソンは注意ということもやはり人間がやるものだというふうに前提していたので、動物にも注意、つまり、この円錐形で言うところの、頂点、現在に向かう働きが適用されるのだとしたら、面白いなというふうに、お話を拝聴しながら思いました。その上でさらに、今日の議論を振り返ると、個人的記憶、パーソナルな記憶全てが凝縮されて、その縮減というかたちで、有用な記憶が提示されるという話もありました。そうした話も踏まえると、動物——ハトでもラットでも——に、その個人的記憶になりうるような一个一个の感情を伴う経験がそもそもされていたのかということ、今話を聞きながら、質疑の中で疑問に思いました。そうやって考えていくと、あの円錐図は動物にも適用できる、というふうにそう簡単にはいかないかもしれないと思えてきます。そう単純でもないかもしれない、と。ただその上でなお、ベルクソン記憶論の厳密な読解という面に留まらず、実験で得られた知見も踏まえて、より拡張的な視座から新たに考えていくべき面白い問題だと思いました。

藤田——動物を考える時に、あの逆円錐図はどうなるのかっていうね。果たして人間と同じモデルでいいのか、それともやっぱり適応というか、進化の過程であの逆円錐図式もどんどん変わっていくのかっていうことですよ。それもまた、今日のその澤先生の話からよりはっきり見えてくる論点だと思います。では平井さん、よろしくお願いします。

平井——非常に刺激的で、かつ最後は熱いメッセージをいただいて、ありがとうございます。震えながらお聞きしました。僕からは、いろいろあった中から二つに絞って。まず一つは注意についてです。これはお二人どちらの話にも関わってくると思うんですけど、ベルクソンが注意ということ語る時に、すごく変わっているのが、「膨張」だということですよ、注意が。普通、日常の語感でも「注意」というと何かこう限定してく、絞っていく、そういうイメージがあると思うんですが、それと逆に見えるようなことを言っている。「よく見る」ことによって最初に見えなかったことが見えるようになる——これは考えてみれば不思議なことで、それはどうということなのかというのが問題です。それに対して、実は膨張してるんだという。そこが結

構通常の注意の捉え方とも違うんだけど、僕はそこに彼の注意理論の面白いコアがあるような気がしていて、それについてどう考えていらっしゃるかということをお願いとして投げかけてみたいというのが一つです。

もう一つは、やはり連合主義ですね。これもお二方どちらにも関わるんですけど。結局ベルクソンの連合主義批判って何だったのかということのを考え直すべきだろう、と。今日取り上げてくださった個別のいろいろな論点はもちろん周知のこととして——むしろそれはいい方向に乗り換えられ乗り越えられているということで——、ただその上で、もっとそのコアにある彼の問いかけということのを考えようとした時に、最後の澤先生の存在論と測定法というもの、それこそ「聴診」的に——今日、杉山さんもいらっしゃいますが——、ドメインごとにですね、色々考え、考え直していく必要があって、単純に一般化できないわけです。ベルクソンは、連合ではなくて、分離だ、つまり、associationじゃなくてdissociationだと言います。最初に全体があるわけですよ。しかも、その全体というのでベルクソンはかなり大きい全体を考えていて、そこからの切り出しなんだと。それはどういうことかということ、要素が固定されていると、全体というのは要素の組み合わせの可能性が取り得る全体になると思うんですけど、全体から出発すると、その同じ全体から無数に異なる切り出しが可能になる、そのロジックがあるわけですね。逆円錐ってそれですよ。逆円錐面が示しているのって、同じ全体の異なる切り出し方だっているのが、この無限の面という仕方で描かれていて。そこに彼はきっと心の多元性・多様性・複雑性というものを把握していたように思います。

それで、これがさっき言った存在論、測定法の話とどうかかわるかということ、一方で運動記憶によって何かを学習するという場面があって、そこではベルクソンは、運動って「やる」か「やらないか」だから、結構そこに非連続性ということのを強調するところがあります。つまり、一見すると連合主義的に言っているように見えるところがあるわけなんですよ、運動記憶ないし習慣記憶に関しては。だけどそれは決して夢の記憶、純粹記憶とかイメージ記憶って言われている記憶から切り離された問題ではなくて、兼本先生のお話でもあったように相互に乗り入れしているんだとすると、非連続的なもの、一見すると連合的な形で出来上がっているものから、他方で記憶の全体論のダイナミズムみたいなものとの間の乗り入れがあるように描かれてくる気がしたんです、今日の議論を通じて。そこに新しいレベルのダイナミズムがある気がして、それで、それについても澤先生が考えていらっしゃることをもう少し伺いたい、そういう質問をさせていただきたいと思います。

藤田——会場の方からもチャットで一つ質問いただいています。丸山隆一さんからですね。「澤

先生から見て、本書でベルクソンが論じている「立体としての記憶」や、逆円錐の「上」のほうの平面や、そこからの「前進」という話はどのように捉えていらっしゃるのでしょうか。そのあたりは、現代心理学とつなげることは考えられるのでしょうか。本日の講演趣旨からはずれてしまうかもしれず恐縮ですが、もしご見解があれば簡単にでも伺ってみたいと思いました」というご質問です。では澤先生、よろしくお願いします。

澤——はい。今回、僕がちょっと読み飛ばしたのかわかんないんですけども、やっぱり制止っていうものが結構大事というふうに思っています。要は「これの後にはこれが来る」だったらこの二つの間には興奮の連合ができるんだけど、「これの時にはこれは来ない」というのが制止の連合、というふうに捉えるわけですね。「パブロフ以来の連合学習研究で進展のあったのは二つだけだ。一つは文脈研究で、もう一つが制止研究だ」というようなセリフがあるくらい制止の研究って、学習心理学の中で、特にその連合学習研究の中ではいろんな進展があったり、臨床応用もあって非常に豊かな分野なんです。

中和と関連しているんじゃないかというご指摘もありましたが、それは全くそうだと思うっていて。今日も話そうかなと思ってメモには書いてあったんですけども、時間の都合ですつとしましたが、おそらく関係してくるだろうと思います。

もう一つは動物の問題ですね。僕は動物に関してかなりの部分については適用できるんじゃないかと思います。ただ、例えばエピソード記憶に関しては動物のエピソード記憶研究というものもあるんですけども、最初ケースを用いた研究で動物にもエピソード記憶があるという実験研究が出たわけですが、その後いろんな研究でいつ、どこで何が、というような個別の情報全部符号化しているんだけど、これを一つのエピソードとしてまとめるところが、動物はあまりうまくいかないというようなことも言われていたりします。ですので、逆円錐の図で説明するにしても、あの中にボコボコ穴が開いているみたいな感じなんだと思うんですよ。こっちの経路では降りられるけど、こっちの経路では降りられませんか、ある平面のところには穴が開いていてつながりません、みたいな。イメージとしてはそんな感じになるんじゃないかなと思います。あとは人間と動物って、いろんなことが違いますので、例えば体の形違って違うわけですね。ハトはくちばしで突っついて反応するわけですけど、人間はボタンを押すこともできれば、ダイヤルひねるとか、いろいろなことができるわけですね。体の形であるとか、そういうふうなものも違っているので、何もかも同じというわけにはいかないだろうと思います。やはり進化的な過去の経験とかも影響あるでしょうし。ただベルクソンの逆円錐の図をいったんこうだと飲み込んだ上で、ではこれの中で動物はどこが無いらろうとか、人

間にはないけど動物にある部分というのはどこだろう、というようなところを考えていくという方がいいんじゃないかなというふうに思います。

注意は膨張であるという平井先生のお話がありましたけれども、これはちょっとあまりにも長くなるので、今度別の機会にやりましょう。それとは別に、目の前にある刺激が情報を持ってなくても、その後に来る別の出来事の特徴が、目の前にある最初の刺激を弁別する手掛かりになるというような実験はあるんです。なので今まさに目の前には無いんだけど、いろんな情報が、まさしく注意と言いますか、違う反応をするために余計な情報、新しい情報がどんどん付け加えられていくってというようなことはあるので、実際付け加えられているかどうかは主観の中なのでわかんないですけども、少なくとも弁別手掛かりが豊かになっていく、というような研究は動物でもあります。なので注意は創造であるってというのは、パッと聞くと、そんなわけあるか、と思うわけですけども、切り口によっては、なるほどこれは創造と表現できるかも、というようなものってやっぱりあるんですね。

この点は、丸山先生からいただいたご質問、現代の心理学で逆円錐はどのような話ともつながってくるかなと思うんですけども、一旦この図式を飲み込んでみたら、今の実験的知見はどう解釈できるかと考えてみるというのはやってみる意味はあると思うんですね。今はそれとは違う理論立てに基づいて実験されていますが、では実験事実はこちら、ファクトはこちらだとして、これを解釈するときに、逆円錐の世界を使って解釈したらどういうふうに解釈できるでしょうか？というのはサイドワークというか、ありえた別の世界ということで、やってみてもいいんじゃないかなと思うんです。多くの心理学者が賛同するかどうかは別にして、存在論と言いますか、公理と言いますか、いったんこの前提でこの世界を見てみましょうみたいなことってというのは、実験事実を歪めない範囲においてやってみる価値があるのではないかと個人的には思っています。

藤田——今日の冒頭で岡嶋さんが、90年代ぐらいに一度試みられたバルクソンと脳科学の接合があまりうまくいかなかったのではないかとおっしゃっていました。その時に一つ、哲学者の側の反省点としては、もっと突っ込んで科学の方に踏み込んでいけば、さらに興味深い共同作業ができたのかもしれないということがあります。我々もやっぱり待っているだけ、科学者に文句を言っているだけではダメで、こちらから積極的に動いていかないといけない。そのあたりが近年平井さんが開いていこうとしているパースペクティブだというふうに思っています。今回こういう形で、私たちが蛮勇を振るうことで、ほんの少しですけど協働作業、共同研究の端緒のようなものが見えてきた。過去の接合の失敗を顧みつつ、私たち自身もさらに未

踏の地に踏み込んでいかないといけないという思いを新たにしています。

IV. 全体討議

藤田——兼本先生と澤先生はそれぞれの分野で大活躍をされているわけですが、このお二人が同席されている場面はなかなか無いと思います。それぞれのお話に対する感想でもコメントでも質問でも結構ですので、お互いの中でのやり取りを少ししていただければ、我々としてはぜひ伺いたいところです。その後で、会場にいらして下さった杉山直樹先生から今日のイベントについて、お二人のお話について、あるいは『記憶理論の歴史』の講義録についても結構なんですが、何かコメントをいただければというふうに思っております。では、最初にまず澤先生の方から兼本先生のお話に対してのコメントをいただけますでしょうか。

澤——今回は僕は、精神病とか全然わかんないってということもあって、そこの話に関しては、ごっそりスキップしてしまいました。実際、この本は心の病について書いてあったり、あるいは失認であるとか失行であるとか、今で言うところと神経心理学が取り扱うようなトピックが、その当時の最新の症例を踏まえていろいろ書かれていて、僕も非常に面白く読みました。第8講のなかで興味深かったのは、心の病というのは何かその原因があって、これが病なのだっていうんじゃないで、心の中に起こる変化に対する反応が病なのだっていうようなことが書いてあってですね。それは確かに熱が出る時ってというのはウイルスなり何なりじゃなくって、それを退治することによって熱が出るし、言われてみればそうか、心の病でもそう言われたらそうなのか、と。すごくその一節が印象に残っているんですね。なので、精神病理学の専門家から見た時に、そういうベルクソンの「病観」ってというのはどういうふうに位置づけられるのか、というのをお聞きできればと思うんですけども。

兼本——僕は決して精神病理学者を代表して話すような立場では。

澤——僕も心理学者代表じゃないですから。

兼本——澤先生が言及された第8講のあのくだりは僕も印象に残っていて、先生のおっしゃる通りだと思います。ちょっと参考になるかどうかわかりませんが、少し関係あるかなと思ったことをお話します。ただし、僕が今から言うのは少なくとも精神科医として中心的な

見解でもないし、精神病理学の立場から見てもきっとそうじゃない見解で、本当に個人的な感想になります。

例えば統合失調症の一番核になる体験が何かっていうときに、内海健先生が金閣寺を燃やした人の話を単行本で書いてらっしゃるんですが〔内海 2020〕、統合失調症の体験の一番核になるところでは症状が出てないんですね。そういう建付けなんです。ベルクソンが第8講で書いているのと少し重なるわけですけども、世界と接続しようとするところで世界とのケミストリーとして症状は症状として出てくるわけですけども、世界を取り込む前の体験のその一番核になる部分では、それは何か人としては耐え難い体験ではあるけれども、少なくとも症状としては表に出てこなくて、自分の中だけで何かが体験されているという。ややこしいのであれなんですけども。

もう一つ別の例ですが、ユング心理学の河合隼雄が講演会ですごく面白いことを言っていました。家族の構造の中では一番強い人が病気になる、というんです。普通は弱い人が病気になると考えそうですが、家族の病気を一番強い人が引き受けてしまうもんだから、それが病気っていう形でその人には出てしまうんだけど、実際には病理性というかそういう何かは見た目は健全な家族の側にあるんであって、病理を出した側でないことがあるんだ、と。

藤田——では、今度は兼本先生の方から澤先生へのコメントをよろしくお願い致します。

兼本——これも単に連想になってしまうのですが、連合学習から、自分のことに引き寄せて連合主義のことを連想してしまいました。神経心理学という学問の中での連合主義というのは、やっぱりベルクソンが批判しているところに今でもかなり近いというか、その限りでは決してベルクソンは古くなっていない印象があります。

その一番極端な例として「視覚失語」が挙げられます。さっき見たodd picture out testで6つくらいの絵の中で果物が一個だけあって、あとは似たような形の石やなんかが5つ描いてあるときに、それを見て「りんごだ」って名前は言えないけども、その中からりんごを選べる。つまり認知できるんだけど、それは「りんご」だって名前が付けられないのを「視覚失語」って言うんです。この現象についてゲシュビントという人は、認知は後頭葉でやっていて、呼称は言語領野でやっていて、両方別々にはちゃんとできるけども、認知と言語が離断されているからできなくなっているだけなんだと、そういう理屈でこの現象を説明していて、そっちの説明のほうも今でも十分有力な説として通用しています。離断仮説って言うんですが、こういった仮説は連合主義のテオドール・マイネルトから直接来ているもので、つい最近までずいぶん

支配的な考えだったと言っていると思います。

ところが、odd picture out testはできても呼称はできない人で、本当に認知が同じだとは限らないっていう場合があるので、本当に離断だけで説明できるかどうかというの疑問なところもあります。ですから、ベルクソンの連合主義批判というのは、少なくとも医学的な脳科学においては今でも直接的に意味があるのではないか。これも単なる連想なんですけども、パブロフのやったこともそうなんですけど、ベルクソンの哲学は、神経心理学の批判的検証としては今でも実際に意味のある反論を含んでいるんじゃないかなって感じがして、澤先生のお話には頷かされる部分が多く、すごく勉強になりました。雑駁な印象で本当に申し訳ないんですが、以上です。

澤——パブロフ自身医者だったということもあって、「古典的条件づけ」という——もちろん彼が「古典的」と名付けたわけではないんですが——あの現象は脳の研究のための道具であるとして、パブロフはそれを用いて晩年に統合失調症に関する臨床活動をしていたりもしました。それからパブロフの講義録を見ると、「催眠」っていう章があったりするんですね。そこではさっきの「制止」の話が出てきて、パブロフは「外制止」とか「内制止」とか、いろんな種類の制止の研究をしているんですが、どの制止が生き物を眠らせるといった臨床的な話題にもつなげていこうとしていたわけですね。ですので、兼本先生のご指摘のとおり、ベルクソンと接合できる場所はあるのだろうとは思いますが。

ただ一方で、パブロフがトマス・ハクスリーの記念講演か何かで言っていたセリフで、「心理学者は歩みを早くしようとしていい加減なことばかりやっている」と。「そうじゃなくて、生理学者が今の心理学者がやっているようなことをやれば、歩みは遅いかもしれないけれども、科学的に確実な成果を積み重ねることができるはずだ」というようなことを言っています。まあ、今僕が聞くと「ほんまごめん」って思うようなセリフをパブロフが言っている。なので実際のところ、パブロフ自身がベルクソンの話を聞いて同意してくれるかどうかというのちょっと悩ましいところかなとは思いますが、ただやっぱり結局のところ切り口の問題かなと思うので、パブロフが言っていることの是非というようなこととベルクソンが言っていることの是非というのは、別に両立しないものでもないと思うんですね。

別に心理学者を代表して意見を述べているわけではないので、他の心理学者は当然違う意見をお持ちだと思いますけれども、哲学とか数学っていうのは知的活動のインフラなので、どういいうインフラの上に建物を建てるかということと、実際に建てる建物の見え方と言いますか、乗っているものが微妙に違ってきたりというようなことはあっても全然いいかなとも思うの

で。繋げられるところというのはあろうかと思えます。

兼本——今日のお話を聞いて、澤先生の学習理論は、ある意味ベルクソンの考えを今、実現されているところがあるという印象をすごく持ちました。テオドール・マイネルトの連合主義からウェルニッケ、リヒトハイム、そしてゲシュビントの離断仮説っていうのがあるわけですけども、そこに至る潮流は、おそらくベルクソンの考えとはかなり対立的というか、相性は悪いと思います。どっちが正しいかという問題ではなくて、これは一つの思想運動というか、さっきのカール・ヤスパースもそうですが、ベルクソンもヤスパースもマイネルトに由来する連合主義を直截に批判しているんだと思います。だから澤先生の学習理論からの連合主義というのと、神経心理学の脳の科学でやっている連合主義というのは違うものではないかなと思います。先生もそうおっしゃってらっしゃいましたけど。

澤——連合主義研究でも右派から左派まで色々いまして、まあ、僕は相当に緩い人間なんですよ。なので、中にはもう古典的条件づけとは、パブロフの犬みたいな末梢のああいう自律系の反応のことなんだと。ただもう一方の極には、随伴性の判断もそうだし、因果関係に関してもそうだし、時空間関係に関する学習だって連合学習の範囲内である、というふうに捉えたりとか、あるいは連合学習の手続きによって、生き物は命題的知識を獲得するんだみたいなこと言っている人もいたりで。これも本当に一枚岩ではありませんので、ベルクソンの言っていることというのも、いろんな層に対して違う響き方をするかなというふうには思いますね。

藤田——右派と左派じゃないですけど、これはどこの世界でもありますよね。ベルクソン哲学の系譜というか解釈史の中にもあるし、精神病理学の中にもある。それが連合学習の中にもあるということでしょうか。さて、関連する補足的な質問をチャットのほうにいただいております。「今のお話で、統合失調症の固有の例を挙げていただきました。双極性障害については、症状が発露し始めるときに特徴的な認知や記憶の事例はあるのでしょうか。どのあたりに統合失調症との決定的な違いがあるか、先ほどのご説明の延長でいただけると理解が深まります」ということです。よろしく願います。

兼本——統合失調症には、我々が普通体験しないような新しい体験が生じてくるっていう、そういう特性がある場合があります。もちろん、みんながそうだというわけではないし、統合失調症でもそんなことを言わない方はいっぱいいらっしゃるんで、全然平均的な話でもなんで

もないんですけれども。

それに対して躁鬱病の場合は、出てくる体験は日常の我々の体験から切れてないんです。あまりいい例ではないかもしれませんが、すごく寡黙な人があるとき急に明石家さんまみたいにしゃべると、病気じゃなかった話になることがあります。でも、明石家さんま自体はきっと全然病気じゃなくて、むしろ平均よりもはるかに精神的に頑健な人だと思うんです。つまり、その横断面だけを取り上げても、それが躁鬱病によるものかどうかという判断はつきにくい。ですから、さっきの統合失調症みたいな例を挙げるのは少し難しいかなと思います。ちょっとお答えになっていなくて申し訳ないですけど。

藤田——このままずっと討議を続けていたいぐらいですが、そろそろ終えないといけません。杉山先生は、学習院大学の同僚の今井久登先生を通じて、澤先生とはすでにご面識があると伺いましたが、それはともかく会を締めくくるにあたってコメントをいただけますでしょうか。

杉山——同僚の今井先生からお話を聞いていて、『私たちは学習している』を慌ててKindleで読んで感動している、ただそれだけなんですけれど、『なぜ私は一続きの私であるのか』のほうも読ませていただいております。

今回の翻訳、この訳注を見た方はお分かりでしょうけれども、一筋縄で行かないテキストをこんな形で翻訳するのは大変なことです。しかもこの価格でとか余計なことを言いますが、手にできるというのは本当に幸せなことだと、何の留保もなく思っています。翻訳に携わられた方々に改めてお礼を申し上げたいと思います。

ベルクソンについて改めて考えた細かいことを言い出すとキリがありませんが、やっぱり『物質と記憶』とか、この講義でもそうですけれども、ベルクソンが使った心的現象についての記述説明、用いた図式というのはあくまでも *élémentaire*、エレメンタリーなレベルだというのは忘れちゃいけないし、ベルクソンは「お前たちにはまだその先に仕事が残されているんだぞ」と言っているんだと思うんですよね。ここらへんの仕事はね。ですから、例えばベルクソンが見落としているというか、あまり語っていない現象として、今日の図式の話でもありましたけれども、どこまでが物質ないし知覚で、どこからが精神で記憶かって、そんな境界は曖昧だって、それはそうだと思うんですよ。

ただ、ベルクソンは一旦そこに線を引いてみて、そのうえでどうやって両者が噛み合って、外見上溶け合ったように見えるのかということをやった。だからそこをどんどん探求してほしい、そういう土台を作っておいたから後を継いで自分たちでやってくれっていうメッセージを

私はあのベルクソンの仕事からは聞きます。やっぱり非常にエレメンタリーですから、実際には身体のほうが記憶に制限をかけながら、でも記憶のほうが身体のを形成してっていうループが普通にあるわけです。普通「学習」と言われたり「癖」とか言われてたりするのはそういうものですね。そういうのがどんどん重なっていくと、そこで機能しているのがいわゆる身体図式であるのか、それともより精神的な動的図式であるのか、いや、そもそもその両者はどういう関係なのかとか戸惑うわけですけど、ここは事実上溶け合っているのだという形で、後は具体的な分析に入っていけばいいんだと思いました。ベルクソンがそういうフォーマットの下で与えている宿題の宿題性というか。それを考えていくのは無益な仕事ではないんだっていうことを今回の講義録とその翻訳は教えてくれたような気がします。

もう一つ、あえて言えば、平井さんがおっしゃったような、あるいは澤先生がおっしゃったような、こういう話全体を司るべきオントロジーってというのがどういうものかっていうのも、やっぱり改めて、もうそれは一回封印されちゃっているわけですけど、だからなるべく身体的・生理学的なレベルからボトムアップの形で説明できるだけしろっていう形で研究が進んでいるわけですけども、ベルクソンは決してボトムアップだけで終わると思ってないわけですよ。平井君はあえてボトムアップでどこまで行けるかっていうのを今展開していて、そのレベルでも十分にベルクソンにポテンシャルがあるっていう形で話を述べるわけだけど。でもやっぱり平井君が最初に言ったように、やっぱりあの膨大な、ほとんど無制限な全体というものをベルクソンは立てるわけですよ。それで、そこからの縮約とか制限とかから今の我々のこういう生の現場があるっていう話をする。もちろん、それをあんまり安直に持ち上げると悪質なスピリチュアリズムになったり、汎神論みたいになったりして、それは使い物にならないんだけれども、でもそういう背景を全然切り捨ててしまったところにベルクソン読解はない、と思うんです。これは左右で言うと右なんですか、藤田さん？ まあ知りませんが。私はそんなにスピリチュアルな読み方に共感はないですけども、それを捨てるのも何か惜しいな、あまり忘れるべきではないなと思っていますところもあります。そういうもう一段外枠からベルクソンが生理学とか記憶論とか、割と具体的なものをどう位置づけているのかっていうことを解明するのも、これまたもう一つの宿題なのかなっていう感じを改めて受けます。というか、そもそも誰も宿題と思ってなんかなかったわけですよ。もう終わったというわけでね。でも、それが本当にダメな学生が忘れていただけだったんじゃないかっていう感じの話を、この一連の講義録とその翻訳は教えてくれているような気がします。みたいなまとめたら美しいですか、藤田さん？

藤田——はい、大変美しいまとめをありがとうございました。みなさん、今日は長時間にわたって本当にありがとうございました。次回は、アリストテレス研究の第一人者である中畑正志先生と、コンディヤック研究から出発して独自の科学哲学を展開されている山口裕之先生をお招きして、「哲学史編」と題して『記憶理論の歴史』後半部をなす歴史篇の魅力についてたっぷりと語っていただきます。

注

- 1 以下は2024年1月29日にオンラインで開催した合評会の記録である。可能な限りの正確を期すため、公表するにあたっては加筆を加えている。
- 2 藤田尚志（本学部教員）、兼本浩祐（中部PNESリサーチセンター）、澤幸祐（専修大学）、平井靖史（慶應義塾大学）、天野恵美理（高崎経済大学）、岡嶋隆佑（新潟大学）、木山裕登（学習院大学）。
- 3 第一弾は〔藤田ほか 2024〕、第二弾の記録の一部は、〔三浦 2021〕〔藏田 2021〕として、第三弾は〔平井ほか 2021a, 2021b〕として公開されている。
- 4 第14講の記録は残されていないが、第13講末尾および第15講冒頭を見れば、第14講までが理論篇であったことは明らかである。
- 5 もう一つ例を挙げておく。「哲学を実証科学の補助者、必要ならば改革者にするべきであると私は言った。理論が実在的なものを緊密に把握し、それと理論とのあいだに他の解釈が入り込まないように努めよう。そのときは科学も哲学も共同の前進的な努力によって形成されるようになるだろう」〔Bergson 2009 : 70=2013 : 90〕。
- 6 最終講義が出版されている〔兼本 2024〕。

参考文献

- AJURIAGUERRA, Julián de, HÉCAEN, Henry, ANGELERQUES, René (1960), « Les apraxies, variétés cliniques et latélisation lésionnelle », *Revue Neurologique* 102: 566-594.
- BERGSON, Henri (2018), *Histoire des théories de la mémoire. Cours au Collège de France 1903-1904*, PUF. ベルクソン (2023) 『記憶理論の歴史 コレージュ・ド・フランス講義 1903-1904年度』、書肆心水。
- BERGSON, Henri (2016), *Histoire de l'idée de temps. Cours au Collège de France 1902-1903*, PUF. ベルクソン (2019) 『時間観念の歴史 コレージュ・ド・フランス講義 1902-1903年度』、書肆心水。
- BERGSON, Henri (2009), *La pensée et le mouvant* [1934], PUF. ベルクソン、アンリ (2013) 『思考と動き』(原章二訳)、平凡社。
- Bergson (2008), *Matière et mémoire* [1896], PUF. ベルクソン、アンリ (2019) 『物質と記憶』(杉山直樹訳)、講談社。
- BROADBENT, Donald Eric (1958), *Perception and Communication*, Pergamon Press.
- DE HOUWER, Jan, & HUGHES, Sean (2020), *The psychology of learning: An introduction from a functional-cognitive perspective*, MIT Press.
- DELEUZE, Gilles (1966), *Le Bergsonisme*, PUF. (『ベルクソニズム』 檜垣立哉・小林卓也訳、法政大学出版局、2017年、(八) ページ、注八九)
- DE RENZI, Ennio, FAGLIONI, Pietro, SORGATO, Paolo (1982), "Modality-specific and supramodal mechanisms of apraxia," *Brain* 105: 301-312.
- DE RENZI, Ennio, Pieczuro, A., VIGNOLO Luigi A. (1968), "Ideational apraxia: A quantitative study,"

- Neuropsychologia* 6: 41-52.
- HEILMAN, Kenneth M. (1973), "Ideational apraxia: A redefinition," *Brain* 96: 861-864.
- JAMES, William (1892), *Psychology: The briefer course*, New York: Henry Holt & Co. ジェイムズ、ウィリアム (1993) 『心理学』上・下巻 (今田寛訳)、岩波書店。
- JASPERS, Karl (1973), *Allgemeine Psychopathologie*, neunte, unveränderte Auflage, Springer.
- LAWRENCE, Douglas H. (1949). "Acquired distinctiveness of cues: I. Transfer between discriminations on the basis of familiarity with the stimulus", *Journal of Experimental Psychology*, 39(6), 770-784.
- LIEPMANN, Hugo (1900), „Das Krankheitsbild der Apraxie („motorische Aymbolie“) auf Grund eines Falles von einseitiger Apraxie“, *Monatsschrift für Psychiatrie und Neurologie*, 8: 15-44, 102-132, 188-197.
- MEYNERT, Theodor (1890), „Amentia, die Verwirrtheit“, *Jahrbücher für Psychiatrie* 9: 1-112.
- MORLAAS, Joseph (1928), *Contribution à l'étude de l'apraxie*, Amédée Legrand.
- SAWA, Kosuke, Leising, Kenneth J., & Blaisdell, Aaron P. (2005), "Sensory preconditioning in spatial learning using a touchscreen task in pigeon," *Journal of Experimental Psychology: Animal Behavior Processes* 31, 368-375.
- SIGNORET, Jean-Louis, NORTH, Pierre (1979), *Les Apraxies gestuelles*, Masson.
- TREISMAN, Anne, GELADE, Garry (1980), "A feature-integration theory of attention," *Cognitive Psychology* 12: 97-136.
- 内海健 (2020) 『金閣を焼かなければならぬ』、河出書房新社。
- ヴェーユ、シモヌ (1996) 『ヴェーユの哲学講義』(渡辺一民・川村孝則訳)、ちくま学芸文庫。
- 兼本浩祐 (2024) 『最終講義：心因と外因を一人の精神科医が診察することの難しさ』、星和書店。
- 兼本浩祐 (2023) 『普通という異常——健常発達という病』、講談社。
- 兼本浩祐 (2018) 『なぜ私は一続きの私であるのか——ベルクソン・ドゥルーズ・精神病理』、講談社。
- 兼本浩祐 (2017) 「ベルクソンの第一の記憶を理解する試み——フロイトの記憶論と知覚失認(精神盲)の自験例を導きの糸として」、平井靖史・藤田尚志・安孫子信『ベルクソン『物質と記憶』を診断する——時間経験の哲学・意識の科学・美学・倫理学への展開』、書肆心水、284-295頁。
- 兼本浩祐 (2016) 『脳を通して私が生まれるとき』、日本評論社。
- 兼本浩祐 (2011) 『心はどこまで脳なのだろうか』、医学書院。
- 兼本浩祐・濱中淑彦・大橋博司 (1986) 「連合型視覚失認を示した脳梗塞の1例」、『神経心理学』 2:144-151。
- 藏田伸雄 (2021) 「カント的立場からのコメント」、北海道哲学会編『哲学年報』第67号、7-9頁。
- 澤幸祐 (2022) 『私たちは学習している——行動と環境の統一的理解に向けて』、ちとせプレス。
- 澤幸祐 (2007) 「古典的条件づけ理論における absent cue の処理」、専修大学文学部紀要『専大人文論集』第80号、245-263頁。
- 澤幸祐編 (2022) 『手を動かしながら学ぶ学習心理学』、朝倉書店。
- 竹田青嗣 (1989) 『現象学入門』、日本放送出版協会。
- 平井靖史 (2023) 「訳者解説」、ベルクソン『記憶理論の歴史』、書肆心水、369-384頁。
- 平井靖史 (2022) 『世界は時間でできている——ベルクソン時間哲学入門』、青土社。
- 平井靖史・青山拓央・岡嶋隆佑・藤田尚志・森田邦久 (2021a) 「ベルクソンと現代時間哲学(上)」、福岡大学人文学部編『人文論叢』第53巻第2号、495-528頁。
- 平井靖史・青山拓央・岡嶋隆佑・藤田尚志・森田邦久 (2021b) 「ベルクソンと現代時間哲学(下)」、福岡大学人文学部編『人文論叢』第53巻第3号、941-969頁。
- 藤田尚志 (2023) 「訳者あとがき」、ベルクソン『記憶理論の歴史』、書肆心水、385-406頁。
- 藤田尚志 (2022) 『ベルクソン 反時代的哲学』、勁草書房。
- 藤田尚志・鈴木泉・納富信留・平井靖史 (2024) 「哲学と時間——ベルクソン『時間観念の歴史』合評会記録」、『九

州産業大学国際文化学部紀要』第83号、29-68頁。

三浦洋（2021）「古代思想とベルクソンの時間論——第5～14講について」、北海道哲学会編『哲学年報』第67号、1-6頁。

米田翼（2022）『生ける物質——アンリ・ベルクソンと生命個体化の思想』、青土社。